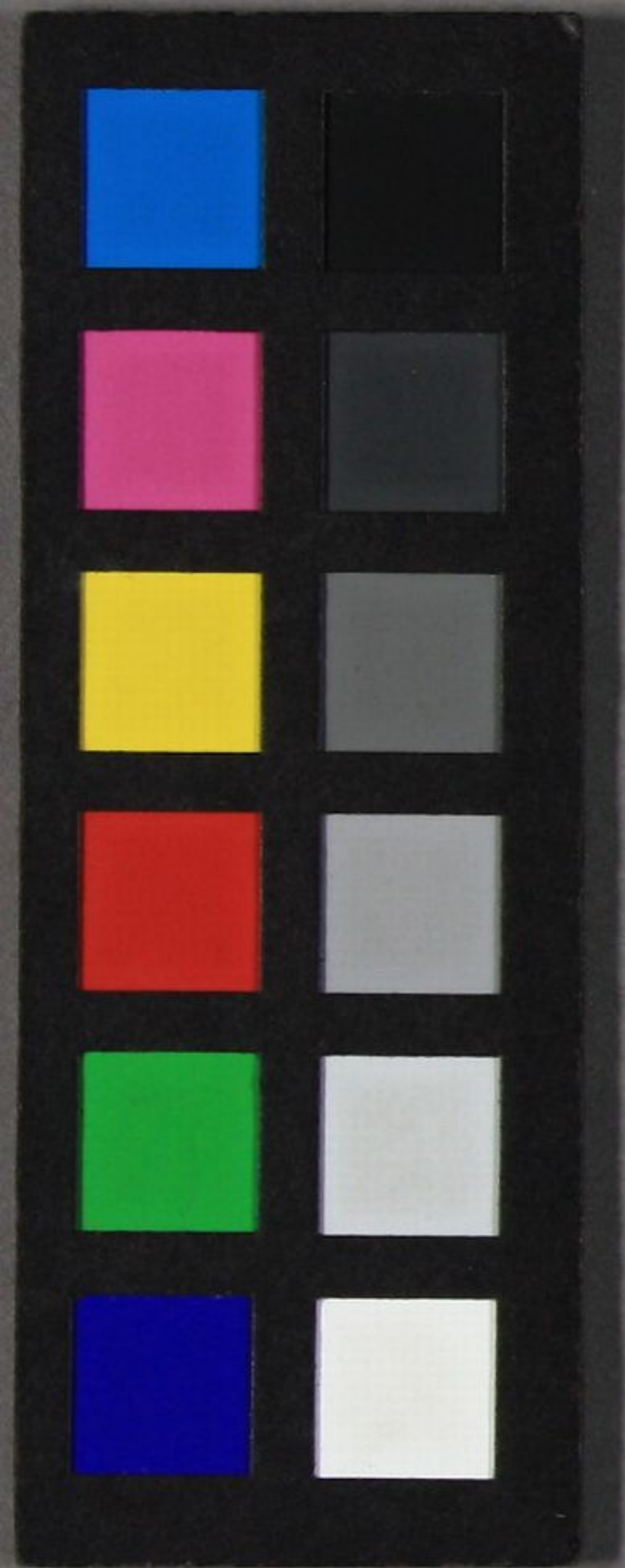


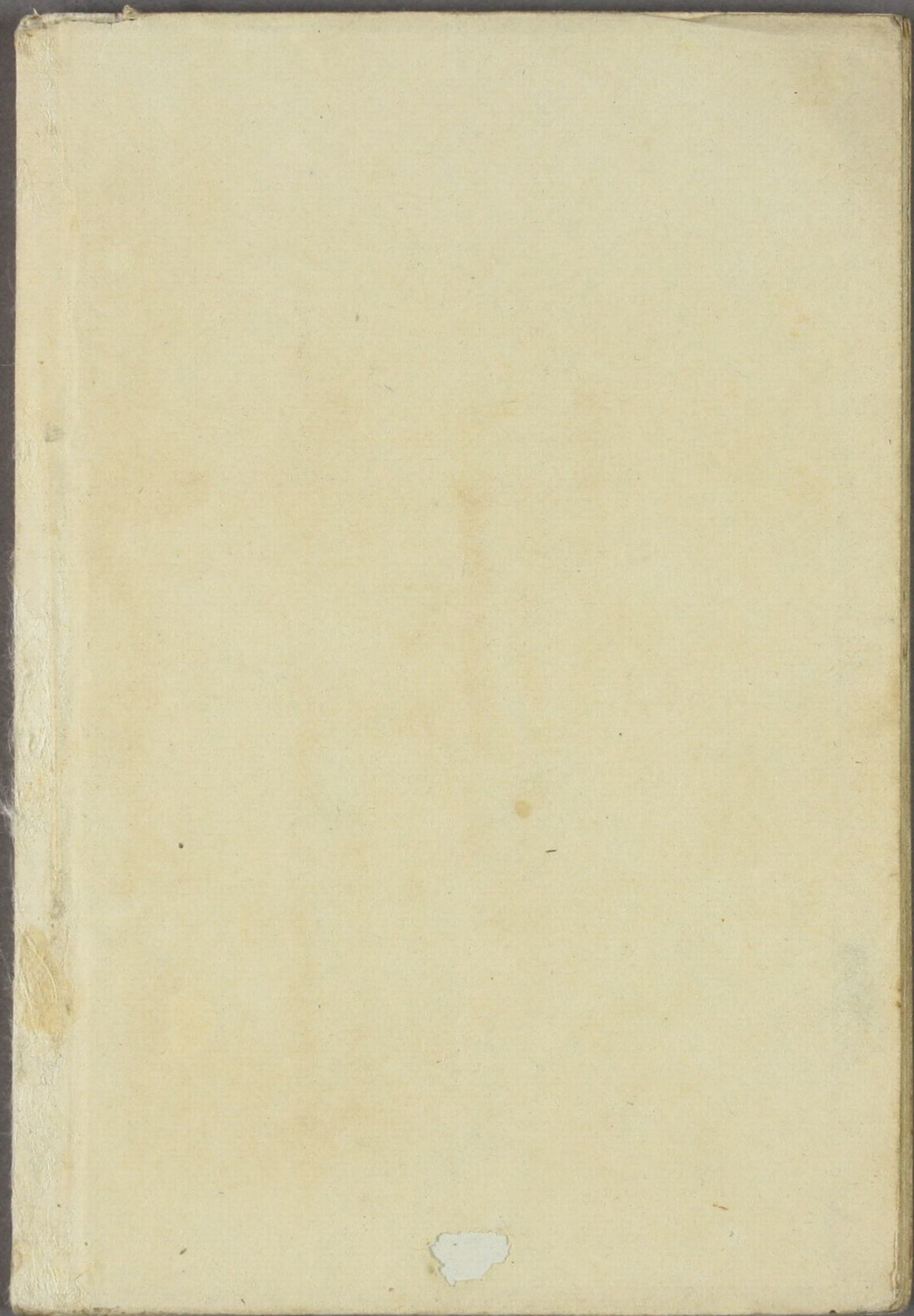
竹內隆信編輯

新體詩歌

三香堂鐫







三香堂藏

德豐春旭

新體詩歌序

新體詩歌序

古人云フ蛙モ亦歌仲間ナリト善哉言ヤ夫レ人喜悲哀樂チ心ニ感スル者アレバ則チ必ス之チ其口ニ發ス其發スルヤ流暢音律アル皆歌ナリ彼ノ詩三百篇亦只口ニ發スル所兒童モ謠ヒ婦女モ和ス何ソ別ニ謂ハレフランヤ西洋諸國ノ詩ニ於ケル亦然リ其平常用フル所ノ語チ以テ其心ニ感スル所チ述ベ而シテ之チ歌フ耳我國ト雖モ往古ニ在テハ其平常用ル所ノ詞チ以テ歌チ作リシナリ今時ニ至テハ則チ然ラス詩チ作レハ漢詩チ用ヒ歌チ作レハ古語チ用ヒ苟モ平常用ル所ノ言語ノ其中ニ在ル有レバ俚俗鄙ム可シトナシテ而メ之チ採ラズ遂ニ今日ノ歌ナル者ハ學者社會ニノミ行ハレ而シテ其他ニ至テハ容易ニ之チ知ル能ハサルニ至ル豈ニ謬見ト云ハサルベケンヤ蓋シ國ノ次第ニ開明ニ赴クニ從ヒ交通ノ日々ニ繁劇ナルヨリ各地ノ言語ハ各地

高橋

ノ事物ト同シク其内國ニ混入シ漸ク平常人ノ用フル所トナル
 卽チ之ヲ其國ノ言語トシテ差支ナキ筈也詩ニモ歌ニモ用ヒテ
 妨ナキ理ナリ然ルニ彼ノ謬見者流ハ開明ノ運轉スル所以ヲ知
 ラズ苟モ歌ト云ヘハ古言ヨリ外ハ用フルコノ成ラヌ様ニ云ヒ
 ナセリ此ノ如クハ事實ニ於テ不都合チ生スルコモ少カラサル
 ベシ假令ヘバもの、ふの弓矢ト云フ可キモ今時ハ「スナイド
 ル」チ擔フコナレバもの、ふの「スナイドル」ト云ヒタリトテ
 差支ナキ筈ナリ而ルモ是非コ弓矢ト云ハチバナラヌトスルハ
 事實ニ於テ不都合チラズヤ之ハ是レ「スナイドル」ト云フ詞已
 ニ國言トナリシチ解セザルノ謬也若シ夫レ古言雅言チ以テ長
 歌短歌チ並ブルモ其平生ニ用ヒサルノ言語ナレバ殆ド外國語
 チ以テ歌チ作ルノ思ヒ有テ十分ニ已ガ情懷チ寫シ出スチ得ザ
 ルノ憾チキ能ナズ古語ハ古代ノ遺言ナリ今言ハ今代ノ通言ナ

リ古人ハ古ノ語チ以テ作ル今人ハ今ノ語チ以テ作ル何ノ妨カ
 之アラソ然ルチ故ラニ小六ヶ敷古書杯チ捻クルハ實ニ笑フ可
 キ至リナラスヤ余此説チ持スルコ久シ頃者竹内君新体詩歌ノ
 編アリト余ニ其序チ請ハル余夙ニ茲ニ志アリ故ニ樂ンテ而
 之チ言フ明治十五年八月新橋僑居ニ於テ

屈山小室弘識

緒言

一此編數首泰西之名家シエーキビーヤ氏之原撰而我邦洋學家之係才翻譯

一誠忠遺訓外二三首者我國固有之長歌也

一又長歌中撰者姓名等屬于漫然者有一二首今不暇檢正讀者幸

諒之

一此編不言古今體詩歌言新體者新體以居其八九也亦不言詩撰而言詩歌者在彼言箴在我言歌其理同也觀者莫爲異以焉

一編中僅々評語其不附者他日爲有所請諸先輩

明治十五年八月

嶮谷竹内節識

新體詩歌第一集

目次

- 楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓之歌○直實敦盛を追ふの歌
- 月照の入水を悼みて讀める歌○舞曲に擬して作る歌○自由の歌○顯理四世を讀める○ハマレット○玉乃緒の歌○拔刀隊
- 花月の歌○ウルセー○大佛に詣て、感あり
- 以上十二篇

新體詩歌第二集

目次

- 勸學の詩○春夏秋冬の詩○カムフヘル氏英國海軍の詩○シヤール、ドレソフ氏春乃詩○西詩和譯○刺客を詠するの詩○外交の詩○俊基朝臣東下り○藤袴の歌○小督乃歌○東の花○長恨歌○櫻狩○芙蓉を詠する乃歌○西行の歌

以上十五篇

新体詩歌第三集

目次

○テコソン氏輕騎隊進撃の詩○朝貌の花に寄せて學童を獎勵す○題秋(西詩和譯)○ロングフェロー氏人生の詩○ロングフェロー氏兒童の詩○社會學の原理に題そ○遊墨水歌○詠和氣
公清麻呂歌

以上八篇

新体詩歌第四集

目次

○虞禮氏墳上感懷の詩○小楠公を詠するの詩○代悲白頭翁歌
○寒村夜歸○西詩和譯○詠史○吊忠魂歌
以上七篇

新体詩歌第五集

目次

○世渡りの歌○夏夜即事○送學友歸郷歌○見燭蛾有感○湘南
秋信○チャールスキングスレー氏悲歌○詠松島歌○佐久馬
象山謫居の歌○西南の役より凱陣せし人祝するの歌○詠石菫
歌
以上十篇

新体詩歌

小室屈山校閱

竹内節編輯

○楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌

建武の昔し正成は肌はの守りを取出し

是は一歳ひととせ都攻めの有ありし時とき下くだし給たまひ玄綸旨しるしなり

之を汝なんぢに與あたふるなり。余われの兔うさぎに角つるぎなるをあらば

世よは尊たう氏の世よとなりて。叡慮えいりょを惱なごし奉たごらん

鏡かがみおかけて見るが如ごとし。さは去いり乍いはら正行せいぎょうよ

父ちちの子こならば流石りゅうせきにも。忠義ちゅうぎの道みちは兼かねて知る

弓張ゆみはり月の影かげ暗くらく家名いへなを汚けがすとなかれ

打洩うちまされし浪なみ黨どうを。ああれみ扶助ふじゆし隱家いんけの

吉野よしのの山やまの奥おく深く。月つきの桂けいの漣さざなみや

流れも清き菊水の。旗を再び翻へし
敵を千里に追ひ退けて。叡慮を安んじ奉れ
嗚呼叡慮を安んじ奉れ

○熊谷直實曉に敦盛を追ふの歌

抑も熊谷直實は。征夷將軍頼朝公の御内
關東一の旗頭。智勇兼備の大將と
世も知られし勇士あり。左れば元暦元年の頃
源平須磨の戦ひの。功名ありし物語り
聞くも中々あわれなり。うの時平家の武者一騎
沖なる船に後れしと。駒を浪間に打入きて
一丁許り進みしを。扇を揚げて呼び戻し
互よしのぎを削りしか。見れば二八の御顔よ
花も粧ふ薄化粧。涅齒黒々と附け給ひ

斯るやさしき打扮に。君は如何なる御方ぞ
名乗り給へとありければ。下より御聲爽かに
我ころの參議經盛の三男。無官の太夫敦盛ぞ
早々首をうたれよと。西に向ひて手を合せ
流石にたけき熊谷も。我が子の事まで思ひやり
落つる泣はと、まらむ。鎧の袖に絞りつ、
是非なく太刀を振り揚て。南無阿彌陀佛の聲諸共
首は前にと落ちにける。無残や花の蕾さへ
須磨の嵐に散りにけり。之を菩提の種として
永々跡を吊ひ申さんと。御あさ體に言ひ遺こし
青葉の笛を取添へて。八島の陣へ送りしは
實よあさけある武夫の。心の中ぞあわれあり
るの身は遂よ。蓮生法師と名のりつ、

都のほに登り元祖大師を師と頼み。剃髮禪衣の身と成て
晝夜念佛怠ちややなんぶつおこたら亦日出度往生ゆうじやうし給ひけり

○月照僧の入水をいたみて讀める歌

平野次郎國臣作

花の都も秋ハ猶夕ふべ淋さみしき風情ふせいあり
名と流れたる清水や。落ち來る瀧たきの乙羽山おとりのやま
秋の葉色の溝みぞこと。散るや紅葉もみぢのちりくくと
亂れゆく世の浪花江なみのへや。蘆あしのさはりは繁しげくとも
猶世のために身をつくし。盡くさんとても筑紫瀧ちくしめだ
波影なみのかげの岸の波なみならぬ。操みさほをいつか深緑ふかみどり
色は替からぬ青柳あおやなぎの驛路はきみちを越こて香椎瀧かきづた
た、の橋を打ち渡り。千代ちよの松原千代かけて
萬代まんだいかけて君が世の。千卜ちひさひ歳の松まつよりうへつ、

神はこに歩あみを箱崎はこさきの。社やしろにかけし四ツ文字の
筆ふでの主ぬしをよく問とへば。延喜えんぎの帝みかど畏おそしこくも
御手みでをを下くだしませりつ、。爰こゝもむかしは石疊いしむらみ
重おもねくし白浪しろなみの。よせし昔むかしし忘れわすれぞと
恨うらみ浦半うらなの片襷かたたきかけて歎なげくも憐あはれあり
沾衣塚せんいづかの沾衣せんい。吾われが身みに着きたる心地こころせり
やがて博多はくたの假住居かりてまゐ。こ、も浪風なみかぜさはがしく
又また行く方は薩摩瀧さつまがた。沖おきの小島こじまよあらねども
心こころ細こくも都みやこにて。誰たれかあはれと思おもふらん
たよるは心筑紫瀧こころちくしめだ。一人ひとりの外ほかに打うかけて
語かたふ人も浮うき枕まくらら。波路なみぢへだて、野間ののまの關屋せきやの關守せきしゆよせさと
められて又また船ふねに
乗のりるも夫おとこと寄よあだき。波なみにをらられて行く先さきは

黒の瀬戸てふ名もうしや。頼て鹿兒島かごの鳥
 つはさ縮めて潜みしが。又木枯の風とをどろさて
 日向を指して船出せし。日は神無月望の夜の
 傾く月と諸共に。照りかゝやきてくもりなき
 身之大君の爲にとて。爰に一人の薩摩瀉
 いかある縁にし前の世に。契も深き船の沖
 底の藻屑とありぬるを。乗合人も船人も
 權の車も露程も。さりどわ知らぬ白浪の
 立ちさはげども甲斐ぞなき。猶東雲の明け鴉
 なくより外はあかりけり

○舞曲に擬して作る

久坂國武作

世はかり菰と亂れつ、赤根さす日もいとくらく
 蟬の小川にさりたちて。隔ての雲とありよけり

うら傷ましや玉ささる。内裡に朝暮とのゐせし
 實美朝臣よ季朝卿。壬生澤四條東久世
 其外錦小路殿。今うさ草の定めなく
 旅にしあれば駒さへも進み兼てぞいをりつ、
 降しく雨の絶間なく。涙に袖は濡はて、
 是より海山淺茅原露霜わけてあしかする
 浪花の浦またく鹽の。からさ浮世はものかはと
 行かんとすれば東山峯の秋風身にしみて
 朝な夕なよ聞なれし。妙法院の鐘の音は
 なへて今宵はあわれなり。何時しか暗き雲霧を
 はらひ盡して百敷の。都の月をしめ給ふらん

○自由乃歌

小室 屈山

天には自由の鬼となり地には自由の人ならん

自由よ自由やよ自由。汝と我れがその中は
 天地自然の約束ぞ。千代も八千代も末かけて
 此世のあらん限りまで二人が中の約束を
 いかこそ仇に破るべきささわさりながら世の中は
 月に村雲花に風。まゝならぬは人の身ぞ
 話せば長いとながら。古し羅馬の國と聞く
 うの人民を自由にし。共和の政治を立てんため
 數多の人のうき苦勞。うれをも知らで慾のため
 我權政を張らんとて再び。帝位に昇らんと
 企てたりしセザルは。うの親友の手よかゝり
 議員の中に殺されたり。うの親友のいふおとに
 民を奴隸になさんより。寧ろセザルを殺さばや
 我の羅馬を愛するは。親友よりも甚し

羅馬の民の望みなら。我身も茲も諸共に
 捨る命はいと易し。佛蘭西國のルイス帝
 自由を壓制なさんとして。種々に手段を廻せど
 邪道はいかに正道に。打ちかつことなるべきぞ
 民のいかりは火の如く。又洪水の溢き來て
 岩をも碎く勢ひに。いと畏くも帝王の
 貴金をかざす冠は。頭斷機械の上に落ち
 あはれはかなくなりける。誰を怨みん壓制の
 自業自得といふべけれ英吉利國の革命も
 同じ車の一ツ轍昨日の王の今日の賊
 コロンウェルが手に持ちし。自由の旗の招きには
 天をも回らす計りにて。チャールズ王を誅戮し
 自由の基を立てたりき。北亞米利加の合衆國

もと英國の民なれど、其發端をたづぬれば
 自由の人となりたさに、故郷の名残に氣も止めず
 深山荆棘のまだ愚か。人のふみてしともなき、
 舟を海原を打ち渡り。見も知りもせぬ亞米利加へ
 殖民なせし心根は。いかにあわれと思ふらめ
 然るに猶も英吉利の。ぼだしの綱は離られを
 暴君汚吏の壓制に。詰り詰りて國の爲め
 義兵を擧ぐるるときくからよ。我後れじと親も子も
 死ぬる覺悟で七年の。長の月日の攻め守り
 遂に敵をば追ひ拂ひ。日出度立てし獨立國
 ワシントンの名に負へる。都と共に榮へゆく
 國のはまれや重まし、嗚呼彼と云ひこれと云ひ
 自由の爲には昔より。數多の人の生き別れ

又死にわかれするも乃を。我東洋の人ぢやとて
 土地よかわりのあるなれど。なにか心よ變るべき
 人の自由といふものは。天地自然の道なるぞ
 つとめよ勵め諸びとよ。卑屈の民と云る、な
 余此文をかされたる。時しも春の夢枕
 眠りをさます鐘の音の。いともさやかに聞へける

○ヘンリー四世

外山正一譯

ヘンリー四世の初ランカストルの「ギウク」したり一旦謀反
 企て、六万人の將としてリチャード王と戦ひて王を俘ふ
 なしたれば自から立て王となり。四方に逆威を震るひしむ
 皇天いかで亂臣を。安穩よして置へさや禍亂交も起り立ち
 戦争止む時更になくウエリス人は蜂起せりスコット人は責
 め入れりヘルセイ一家叛逆す。王を暗殺謀るものりの數い

とも多かりき。議員の権理を打ち守り王に烈しく抵抗す財
政最とも困難し王の人望失ひて。健康漸く衰へての晩年
に至りての。自かゝ悔もるの悪事。心で心責められて。安
眠とての片時もなすことならぬ苦しさよ。此一篇のこれぞ是
れらの有様をうつしたる。シエキビールの名作ぞ廣い世界
のろの中に。王者の数の多けれど、ヘンリー四世ならざるは。
幾人あるや聞まばし

いと下賤なる我人の、枕を高く高いびき

今しも睡るの数の。幾千万もあるならん

嗚呼うらやまし羨し。眠るの神よ眠り神

天より我に賜りて。伽さるところ云ふべけれ

如何なる罪のた、りにや。眠の神に見はなされ

たとへ暫時の間たりとも。胸のくるしき忘れたり

まぶたを閉て眠らんと。いかゞそれとも眠られず。

そも如何なれば眠神。見る影もあさあばら家の

くすばりかへる藁の床。むさくるしきもいとほきよ

心地もよげよ横はり。枕のほとりバタ／＼と

飛び来る虫の羽音さへ眠りを誘ふ助

すやく／＼眠るものなるは伽羅沈香をたきたて、

床乃上なる天蓋は。金襴緞子もて作り

眠を誘ふ樂の音は。いと心地よく聞ゆなる

貴人高位の閨までは何とて來ることのなき

げに愚かなる神ぞかえ。何故又斯く見苦るしき

不潔な床よ横はる。下賤なものと寢はするも

王者の床よ來らぬぞ。金乃時評と號鐘と

比への者にいならぬのを。はていぶかえき神乃意ぞ

ゆらくゆる、ほしら朝柱乃。高さ上も安くねる
 水夫乃目をとちバ閉さえて。なさけあらしや用捨もあらかみ荒浪や
 吹き來る嵐凄じや。うづまく浪をまさわけて
 天地とどろく浪音は。死人もさむる程あるに
 下は無間乃地獄なる。高さ柱のそ乃上て
 浪もゆらめき眠らす。神乃力ぞ不思議なる
せうしん物身水にひたされて。身を粉よくたく水夫には
 かくさのがしき其折も。眠る乃神は付き添ふに
くさき草木も眠るうしみつとき丑満時。眠を誘ふそ乃工夫
 手を替へ品をかゆるとも。王者乃側も來らぬの
たごひいき依怙最負なる神もこそ。あ、幸多き賤が身の
 寝ろやねむきや羨し。つらく思ひ合すれば
 冠り着たる頭ほど。苦しきも乃の世にあらじ

○ハムレット

井上哲次郎譯

ながらふべきか但た又。ながらふべきも非るか
 爰が思案のしどころぞ。うんめい運命いかに拙さも
 これも堪へるがますらをか。又さはあらで海よりも
 深き遺恨に手向ふて。之をいふすがも、のふか
 とふも心も落かぬる扱ても死なんか死ぬる乃は
 眠ると同じ眠る間は。心痛のみか肉体の
 あらゆるうさめ打捨つ。是ぞ望のはてなふん
 ア、しぬねむるねむる時。若しを夢みるとあふが
 マアこだわりが有様ぢや。なせと云ふに死にねむり
 無常の風にさそひれて。此娑婆離れしもの、ふとも
 如何なる夢の來るや。ハテ疑ひの晴れぬもの
 うささと長く忍ぶのも。これが爲かな、せなれば

九寸五分さへもちたれば。其切先きで一トつさよ
 事をすますもやすけれど。之をば爲さず慎みて
 强者乃非道世乃そまろ。驕れる人のはずかしめ
 思ふ美人の不深切。緩とそぎたる國の法
 貴人の無禮又たとへ。下人となつて善とても
 輕しめらるゝ之を是れ。堪て忍ぶの何故ぞ
 重荷を負ひて汗流し。うい目つらい目こつへつ、
 暮らせぬくらし暮らすのも。亦何故そ是のみな
 死後の恐が有かちぢや。死出の山路の不思議なる
 登てかへる人どなき。如何なるとのあるやらん
 物すぶくこそ思はるれ。たとへ此世は止まりて
 ろさ艱難をなむるとも。あの世のといおそろしや
 ○井上巽軒曰。畏死之情述得精妙。

かくと心に思ふ故。たけき心も弱くなり
 如何なる深き大望を。花をひらかず枯うせて
 實のなるをどなかり。左のさりむらオヒリヤよ
 ア、たをやかおそむ風情。そなたは神を禱るなら
 としが罪障わびてたべ

○玉の緒の歌

井上哲次郎譯

眠る心はしぬるなり。見ゆる形はおぼろなり
 あすをも知らぬ我命。あわれはかなき夢をがし
 など、あわれにいふは悪し。我命こそまことなれ
 我命こそたしかなれ。墓のおはり乃場所ならず
 人は塵よて又散ると。いふはからだの上のこと
 人の願ひの喜びか。人のねがひの悲みか
 人の願はこきならず。唯怠らず働きて

今日よりまさる明日をまて。業は久玄く時の馳せ
強き胸だも亦たへず。鼓乃如を打ちつ、け
一日くくと近なる。死出の旅をば速するあらそひ多き世
の中に

此身をよせてさきがけに。なりいてますく進むべし
言なき啞となるなかれ。率る、牛となる勿れ
如何よ未来の樂しきも。いかに空しき過去なるも
ともよこれをば捨て置きて。われを忘れず神をしり
はたらくべきの今日ばかり。すぐれたる人世に多し
我れとても人相同じ。勉めのけめば斯くならん
ゆめ怠らず務めなば。長く残さん此名をば
海より荒き世の中よ。舟失ひて浪の間よ
獨り漂ふ我友の我名をさ。て勇まなん

我名をさ、て進まなん
さすれば人は氣を張りて。事業のかりに心玄て
如何なる運もとせせ。高きよ至れ馳せゆけよ
た乃しみあるを働けよ

○弘云詞句精巧押韻自在敬服々々

○拔刀隊

外山正一作

我は官軍我が敵の。天地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たるもの。古今無双の英雄で
之よ従ふつともものは。ともに慄慄決死の士
鬼神よばぢぬ勇あるを。天の許さぬ叛逆を
起せしも乃は昔より。榮へ玄ためしのあらざるぞ
敵の亡ぶる夫までい。進めやせ、め諸共よ
玉ちる劔ぬきつれと。死ぬる覺悟で進むべし

皇國の風ともの、ふの。其身を護る靈の
 維新このかたをたれたる。日本刀の今更
 又世といづる身のはまれ。敵も身方も諸共に
 刃の下に死すべきぞ。大和だよいあるものは
 死べき時の今なるぞ。人よわくれて耻かくな
 敵の亡ぶる夫までい。す、めや進めもるともよ
 玉ちる劔ぬき連て。死ぬる覺悟で進むべし
 前を望めば劔なり。右も左も皆劔
 つるぎの山よ登るのは。未來のこと、聞つるよ
 此世よ於てまのあたり。劔の山よ登るのも
 我身のなせる罪業を。ほろばすためよ非をすして
 賊を征伐するがため。劔の山も何のその
 敵の亡ぶる夫までい。進めや進め諸共よ

玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし
 劔の光りひらめくは。雲間よ見ゆる稲妻を
 四方よ打出す砲聲は。天にとどろく雷ぞ
 敵の刃に伏すものや。尤に碎けて玉の緒の
 絶へてはかなく死する身の。屍の積て山をなし
 其血の流れて川をなぞ。死地よ入るのも君乃爲め
 敵に亡ぶる夫までの。進めや進め諸共よ
 玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟です、むべし
 彈丸雨飛の間も。一ツなき身をおしまづよ
 進む我身の野嵐よ。吹かれて消る白露の
 かなき最後とくるとも。忠義の爲めに死する身の
 死して甲斐ある者なれば。死ぬるも更よ怨みなし
 我と思へん人達の。一步も後へ引く勿れ

敵の亡ぶる夫までは。進めや進め諸共に
 玉ちる劔ぬきつれて。死ぬ覺悟で進むべし
 我今爰も死ぬるのは。君のためあり國に爲
 捨つべきものは命なり。たとひ屍の朽るとも
 忠義の爲にすてし身の。名は芳はしく後の世も
 永く傳へて残るらん。武士と生れた甲斐もなく
 義もなき犬と云はる。な。卑怯な者とそしられな
 敵の亡ぶる夫までの。進めや進め諸共よ
 玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし
 ○花月の歌
 月と花とは昔より。誰が樂まぬ人やある
 たがよろこばぬ人やある。さはさりながら月花も
 心よつきてうきことの。種となるもの多からん

小室弘作

足柄山の風すごとく。松風よそら簫の音を
 これより遠く奥州へ。いくさといへば身の末は
 死ぬか生るか白河に。關をば雲や隔つらん
 忽來の關の春乃くれ。駒をとめて眺むれば
 都の空に花ぐもり。鎧の袖に散かゝる
 櫻の雪は將軍に。鬢の霜より尙白し
 戦の枕に夜を慣れて。秋のあはれも知らざれど
 越山乃月のいと白く。雲間を渡る鴈乃音も
 故郷の空をかへるぞと。思へば我もなつかし、
 花は都にあきはて。何處が我身のおきどころ
 今宵一夜の宿頼む。櫻の霜は袖ぬれて
 滅亡爰にきへおりて。平家の末ぞ悲しけれ
 佞人ばらの讒より。諫めの言は容れられん

二人ともなき賢臣は。筑紫の浦のわびぢまい
 御衣を拜まて涙なる。心の底の如何ならん
 我君今の賊のため遠き嶋ぢに行玉ふ
 無念の心やるせなく。十字をしるす櫻の木
 我が赤心を申さん。杯か多言を要すべき
 月の光や花乃香や。幾萬年と経るとても
 更よかどりはなきなる。常なきも此と世の治亂
 月を見く酔ひ花を見て。睡れる春の手枕の
 只一場の夢の間。うつる興廢存亡の
 世のなり行そ無常なれ。若しも世運の拙なくて
 上には君を煩ひし。下よは民又苦勞させ
 國乃亂る、その時は。月此光はか、やくも
 花の色香はにはふとも。なごたのしみのあるべきぞ

されば世間の諸ひとよ。今よりまで、ろ引起し
 國の光を東海の。月よりも尙輝かし
 國此ばまれをみよしの、花よりも尙芳バしく
 するこそ今のつとめなり。誓て斯もなせ玄後
 樂しき月と玄て見たや。樂しき花見をして見たや

○ウルゼー

山仙士

れさらばさらばいざさらば。再び會たぬ暇乞ひ
 榮よ長く別るべし。人の習の皆都て
 利運の端の芽出えな。八重に花咲き花盛り
 位に位重りて。榮曜榮華を極むれば
 愚を胸よ思ふ様。連運強く望みかない
 天よも登る龍なりと。悦びいさむおろかさよ
 冬や、深く置く霜の。情け用捨め荒野原

根、まてを枯す霜枯に。運極のまりて身は墮落
 見るもあはれな有様の。我か今日れ身の上ぞ
 永の年月心なく。名譽の海は浮べるの
 板子を頼みらくかくと。遊ぶ童子に異ならず
 丈の立たざる淵に入り。飽まで強き我が意地を
 堪へおふせず張り裂けて。勞れつてたる精神は
 忠を盡して年寄れる。其の甲斐もなく今はのや
 身の零落は涙川水屑とこそは成るべけれ
 淨世の虚飾や零れ程。思ひべきものはあらむかし
 今に至りて我が胸に。初めて悟る所あり
 廣き世界の其内て王者の機嫌取り取りに
 此世を渡る男ほど。憐むべきはあさぞかし
 願ふ所の其笑顔。恐る、所の其不興

彼と是との氣がねして。憂さ恐怖さの數々の
 軍するより尙は多し女子の機嫌取るも増す
 逐々零落する時天より落るルシフアなり
 再び浮ぶ瀬はあらむ

評曰字々悲壯巧模ニ寫寵臣末路之眞境ニ身無ニ才藝ニ徒恃ニ君
 寵ニ以弄ニ威福ニ者足ニ以爲ニ誠矣

尙今居士

○鎌君の大佛よ詣て、感あり
 今を去ること數ふれば。六百年のそ乃むかえ
 建長乃ころは鎌君よ。稻多野局のたてられし
 總青堂の大佛の。御身は丈けむ五丈よて
 相好いと、圓滿し。見者無厭の尊容は
 何れ乃地にも比類かし。さるに明應四年とや
 由井のつちみの難より。大殿破壊の其後と

紫磨金仙も雨にぬれ。風に暴あされたまふこと
 殆ど爰に四百年。このこれ人に聞くところ
 余も此頃鎌倉の。古跡たづねておちこちと
 杖をひきつ、大佛に。詣で、心おちつけて
 しかと尊顔目あぐれば。はちその花もおよびなき
 淨きよさ如來の御心は。外にあらはれ何となく
 涅槃ねはんてふ語の思はれて。凡夫不覺ほんぶふおぼの余とても
 しべしの間胸の雲。はれて無明むめい乃夢は醒め
 眞如しんによの月の圓かなる。影を見たるよあらねども
 見たるが如き心地せり。夫れ物事のなりたちは
 頼たのみにと、おふことぞなき。むかし羅馬乃帝國の
 シーザルひとり智を震ふるひ。起りしものにあらずかし
 徳川氏の繁昌はんじやうは。家康ひとり徳ありて

成りしものとな思ひぞよ。時勢人情やうやくに
 はこびて此に至りてき。鎌倉山の大佛も
 浮屠うと氏の教わたり来て。千百年余を過ぎし後
 人の信仰厚くなり。鑄物の術も具そありて
 初めてなりまものならん。稻多野局の時代よ
 此大佛より打向うちむかひ。精神こめて手を合せ
 天下泰平安穩あんおんと。わが後生とを禱いのれども
 今の明治の聖代せいだいに。生れま人の然しかりせむ
 佛の面おもてとうち眺め。おかしのこと思ひやり
 そのいもの師の巧みなる。わざを響なむるの外ほかのなし
 かわれば變かはる時勢かな。秋の空にも劣せうるまじ
 昔の人の是となせし。事も今では非とぞなる
 今日けふのまことと明日あしたのうそ。あすの教しよのあさつての

非理邪道とやならん。天地萬物一定の
規律によりて進化すと。學者のいへど是を之れ
しかど心又認めたる。人の果してなかるらん
嗚呼盛なる大佛よ。六百年もたつた川
からくれないのもみぢ葉と。流る、水を年々に
人乃譽ることならむ。尊体こ、に在ます間は
如何に時勢のかわるとも。年々人の尋ね來て
歎賞せざることもなけん

新体詩歌第壹集畢

新体詩歌第二集

竹内節編輯

○勸學の詩

昔し唐土の朱文公
我が學問をす、めんと
一生涯の春の夜の

失田部良吉

よに博學の大人をがら
少年易老の詩を作り
夢の如しと嘆きけり

國の東西世の古今
學の道よ就くもの
同じ多少の感慨と

春の初花秋の月

人の高卑を問はずして
いかよ才能ありとて
起さぬとのあるべしや
夏のみどり葉冬の雪

都て此世乃物事に
わが學藝を省りみて

心をとむる時あらば
過る月日を思ふべし

池のみぎはの春草は
軒端のきば茂るさりの葉は
此年このとしも半ちよはば過ぬるを

みじかき夢を覺ぬまよ
吹く秋風よさそはれて
文讀あひよむ人のしらすやは

年の月日は長けれど
ひとよ乃如く患あはれ
螢ほたてや雪ゆき光ひかりりにて

難波なには入江の村あし乃
我身の上のわがみむかえさ
文は讀めども業わざあふむ

昔むかしの人の學問は
なほ賢人の嘆なげきあり

唯一ただひすぢの道なれど
今は學術多端おおくよて

枝よ小枝に末葉まで

いかで凡夫ぼんぷの能よすべき

さの云ふもの、諺に
海乃初めはひとしづく
心をあめていつまでも

山のやまのしめは一塊土いっぺん
いかよ急いそげと詮せんなし
怠おろそらぬこりよかりけれ

たとひ多くに渡らぬも
身の爲ためとなる多おほからん
蜂はちに能あたり蜜みつつくる

唯一ただひ藝げいを修おこめなば
蜘蛛くもに藝げいあり網あみをはり
何なにとて蟲むしに及およばざる

勉つとめ勉つとめよたもみなく
難むづき事こととて厭いとふあよ
教おしの山やまよしこりあり

進すすみ進すすめよよどみなく
學まなの海うみに舟路ふねぢあり
丈夫まこと何なにかを怯おそるべき

○春夏秋冬の詩

矢田部良吉

此詩は句尾乃二字を以て二句づ、韻を踏みたるものなり例へば「よろこばし」「暖かし」の如し

春は物事よろあはし
庭の櫻や桃のはな
野邊の雲雀はいと高く

吹く風とても暖かし
よに美しく見ゆるかな
雲井遙かに舞ひて鳴く

夏は木草の葉も茂り
夕暮かけて飛ぶ蟲は
人は我家を立出で、

百日紅も咲きよけり
集まり来る軒のきは
猶涼むらんさよふけて

秋は尾花よをみあへし
晴れて雲なき青空に
されど何處も同じこと

桔梗の花も開くべし
照らす月影明か
寂しく見ゆる家の外

冬は雪霜いと深く
なさん爲とて爐火に
風は吹入る戸のあはい

冷ゆる手足を暖く
近く團居かする時に
外の方見れば銀世界

○カムグベル氏英國海軍の詩

矢田部良吉

イギリス國の海岸を
一千年のうのあひだ
戦争のみか嵐をも
敵を受く共たのみなく

固く守れる水兵よ
汝が建つる大旗は
支へ得たれば此後
勇氣の限りひるがへせ

軍烈しくあらばあれ

立ちくる海の浪間より
汝を扶けたまふべし
其甲板はてがらの場
大テルソンやブローキの
軍烈しくあらばあれ

四方海なるブリタニヤ
山とたちくる波とても
慣れて我家に異ならず
船より放ち轟かし
軍烈しくあらばあれ

嵐も強く吹かば吹け

汝が祖先あらはれて
蓋し祖先の軍艦の
大海原は其墓場
死よし處は人々の
嵐も強く吹かば吹け

とりでも城も用はなし
千尋のそこも淵とても
いかづちなせる大砲を
波をわけつ、進み行を
嵐も強く吹かば吹け

國の光とたてま旗
危難も都て解け去りて
其時汝つはもの、
歌に唱ひて悦びて
烈まき軍すみま時

益光りか、やきて
大平の日にもどるらん
いさはま響めて諸人が
安榮限りあかるらん
強き嵐しのやまま時

○シヤールドンアン氏春の詩

春の景色の、どけさを
冬の物事さびまきも
どけて樂み限りなし
人をあやますとどなき

いかで好まぬ人あらん
春は心のをのづから
雪もみどきもふる雨も
のどけき春の來る時は

北風強く吹く冬は
雨もあはりていと寒く
爐火近く圍居して
されど嵐も雪も歇む

野邊には深雪木は氷柱
障子ふすまを建廻はし
ねぐらの鳥にとならせ
のどけき春の來る時は

曇りがちな春の空
去と春にもありぬれば
光りのどけき天を見る
跡も残らぬ消へうせぬ

日影もうぞく晝をらし
喜ばしくも雲はれて
いぶせく降りし雪霜は
のどけき春の來る時の

○西詩和譯

息の出入とからだの血
清さたましひくれ命

坪井正五郎

しかのみならず宜心地
時計のめぐり早やたち

遽に變る針の位置

歳のすくとも業とさち

なきは則ち無能無智
よき働さを爲せる後

多く考へ氣をためち
長しと言はんこの命ち

井上巽軒曰。押韻自在。可喜。又曰。學者日誦之以勗。則其
進步可期而竣也。

○刺客を詠むる詩

大學のはかせたちのものせられたる新體詩抄の體に倣

八門奇者

天を仰げばいと廣し。地見わたすも亦廣し。うの中に住む人に
して。なごか心の狭かりし。狭き心の一筋。此の人。有らば世
の爲に。も、しき事や起らんと。思ひとびけん朝夕。やがて
病まかこつけて。勉めえわざも打棄て。時の花散る春風の。な
ごやの里に歸り來て。うれと言はねど父母よ。是ぞ此の世に

別よ。厚き恵も報い得せ先たつ罪は免してよ。うからはらから
 友がききに。告げんとすれど告げがてに。ねもい煩ひかき殘せ。
 心は盡さむ執る筆に。今日春雨のふる里。もはやたち出る旅で
 ろも。傾む經せして稻葉山ふもとに着きぬ嬉しくも。識る人と
 てはながら川ねもふかたきにあふ瀬をば。尋ね問ふべきよま
 めがな。とく揮まはしこの白刀。憎さむ憎しかのかたき。非ぬ
 望みを胸にをき。下ある民をそ、のかし。上の掟を言ひあは
 き。上を崇むる人をしも。諛ふものと謗れども下よへつらひ民
 にこび。ねぢけいでたる彼等ども。佐賀に起りし箭さけびも。
 長門に降りし火の雨も。薩摩の瀬戸に幾千々の。人を沈めし浪
 風も。うたてをばあれど君がため。高鹿もろこしも討鎮め。國
 のみいつを振はんと。思ふ餘りの其の結局。憎むべしとも覺ゆ
 れど。思ひかへせば可惜ひと。是に引かへ彼のともは。世の正

道を亂さんと。彼の蠢けき佛蘭西の。血の波たちし禍津世の。
 首斬り臺に國王を。ひさすへたりし當時の。いと淺まきくふる
 まへる。あとに心やとまりぬる。口をひらけば鮮血もく。世を
 洗ひんと叫ぶなる。かゝる勢ひつものりなば。危からよし大君は
 いで大君の御爲に斬り斃してん彼の人の。さはさりながら彼
 の人の誠にかくも思へるか。附き従へるにせもの。妄にしか
 はいふなるが。とにもかくにも彼の人の。心の底を知らんどの
 願ひかなへてまのあたりゑんせつ聞しその時の。心の中にい
 かなりし。今はすこしも宥されし隠し持たたると首。袖の裏に
 て抜き放し。待つとはさらに彼の人は。神ならぬ身の思はねば
 鼻高らかにしづしづと。歸る跡より飛びつけば何故のりてか
 くすると。言はせも果てず何故と。問ふは愚よ汝こそ。今將來
 の國賊と。閃く刃はとはしる。血をほめ赤き心なる。此のます

らをの真心の、貫かざるを怨みなる、よしやうらみは遺るとも
なほき其の名は世の人も。ふみにしるして音高く。語りつぎな
ん千世までも。されど敵と見ひがめし。其の紳士は世にためし
。そくなあさまでもあつかりき。君に忠なるこゝろざし。國に
つくせるこゝろざし

○外交の歌

屈山居士作

西に英吉利北に魯西亞。油斷な爲せそ國の人。外表に結ぶ條約
も。心の底は測かられず。萬國公法ありとても。いざ事あらば
腕力の。強弱肉を争ふは。覺悟の前のとなるぞ。嗚呼同胞の兄
弟よ。御國に生れし甲斐あらば。盡せや勵め諸共に。まこゝろ
込てつくそべし

○倭基朝臣東下

落花の雪に踏み迷ふ。片野の春の櫻狩り。楓の錦を着て歸る。
嵐の山の秋の暮。一夜をあかす程だよも。旅寐となればものう
きよ。恩愛のちざり淺からず。我が故里の妻子をば。行衛も知
らず思ひをさ。歳久しくも住みなれし。九重の帝都をば。今を
限りと顧みて。思はぬ旅よ出て給ふ。心のうちぞ哀れなりうさ
をば留めぬ逢坂乃。關の清水に袖ぬれて。未は山路を打ち出れ
濱の仲を遙かに見渡せば。汐ならぬ海にこがきゆく身をうさふ
ねのうさ沈み。駒を轟るとふみならず。瀬田の長橋打ち渡り。
行きかふ人に近江路や。世に畔に野に啼く鶴も子を思ふかど
哀れなる時雨もいたく森山に。木に下露に袖ぬれて。風よ露ち
る篠原や篠わける道すぎ行けば。鏡に山のありとても。涙にく
れて見分たぞ。物に思は夜に間に。老蘇に森に下草に。駒と

と、めてかへり見る。故里くもや隔つらん。番場鮫ヶ江柏原。
不破比關屋はあればて、猶漏るも乃は簷乃雨。いつか我身比
尾張なる。熟田比八劍ふしをがみ。潮子よ今や鳴海瀉。傾く月
に道見えて。明ぬ暮れぬと行く道比。入相なれば今はとて。池
田比宿に着き給ふ元暦元年比頃とかや。重衡申將東夷比爲め
。捕へれて。此宿に着き給ひしに。

東路比羽生比小屋比いふせきに

古里いかに戀しかるらん

と長者乃娘の讀みたりし。うら古乃あわれまで。思ひ残さん涙
なりける。旅館乃燈幽にして鶏鳴曉を催せば四馬風に嘶い
て。天龍川をうち渡り。さよの中山越え行けば。白雲道をうづ
み來て。うらことも知らぬ夕暮乃。家郷乃天を望みても。昔し西
行法師の命成けりと。詠じつ、。再び戀し跡迄も。うらやまし

くぞ思はれける。隙行く駒の足早み。日既亭午に近ければ。
登餉する程とて。興を庭前におろし。長柄を叩て警護乃武士を
近づけ。宿乃名を問ひ玉ふよ。菊川とやすきと答へければ。
承久合戦のとき。院前書きたりま答に依り。光親關東に召し
下されしに。是の宿よて誅せられしとき

昔南陽縣菊水酌下流延齡

今東海道菊川宿西岸終命

とかさたりし、遠き昔の筆の跡、今我身の上は成り、あわれ
やいと、勝りけん、一首の哥を詠きて、宿の柱にかけられける
いよしへも斯るためしを菊川の

同まぶがれよ身をや沈めん

○故里の益子が許より蘭よ長哥をへておこされければ

藤田東湖

敷ふれば。はや二とせの旅枕おどろかれよ。玄秋風も。まどしは
 さすが聞きなれて。うきとも知らず白雲乃。棚引く間より。も
 る月比。かげも隅田の夕べへを。獨りながむる蓬生よ。ふる里
 人のおとづれていとめづらき藤袴。明石も須磨もあれ庭に。
 時し忘れて咲きよほふ。あれか色香と言の葉よ。そへてはる
 くれみせしよ。深きなさを杯よ。うけて酌みつ、敷島の。
 やまどのみかは海原の。よそなる國のまどまでも。思ひ渡せば
 世の中の。つらきためしも人の身の。ふさのぬ事もありそらみ
 濱の真沙のかむよりも。なほさはなれば君が爲め。うづもる、
 身は。あまは瀉。あしのふしさへ中くよ。よしともいとん秋
 の夜の旅のあはれをふる里の。春よ逢ひぬる心地とやいん。

○小督の哥

牡鹿なく。此乃山里とゑいじけん。嗟峨のあたりの。秋の頃ち
 くさの花も。さまぐよ。虫乃恨みも。深きよの。月にまつ虫。
 招くは尾花。萩よは露の。玉虫や。そよぐをき虫。くつは虫。啼
 音よつきて。中國が。寮の御馬。たまりて。どのいすがたの。
 藤袴たづぬる人の。おもかけにたつ薄霧の。女郎花それかあら
 ぬかまぼろしの。蓬が島根。たづねわび。駒引とむる篠のくま
 息ふかげの。松風よ。かよふつまおと。つまこひの。ねよる鹿
 よ。あらねども。昔し覺ゆる。ふる竹や。合すしらべ乃まがひな
 き。みゑををるべよ。したひよる。嗟峨の、奥の。かたをり戸。
 想夫戀乃唱歌は。此翼の翅の。雲井を越へ。盤渉調のしづべの。
 松の連理の枝よかよふ小督の局。世を忍ぶ。さみかも明日は。
 大原に。かへん姿のむごりとて、よはよ手習す。つまごどの。い
 りあす思ひ。せさかねて。涙に袖を。か、まばや。人目も如何

あやめがた、糸の色音を、しるべよて、さし入月の、雲井より、御使よまへりまど、かしこき君か、詔り、野べのおちかた、わけきつ、露の玉章、さまよするつおとの、はしの、縁の綱又ひき結ぶ、御還りごと、そへて玉はるいつ、衣、さぬく送るほども無く、迎へ此車、たてまつり、昔しにかへる百敷や、く、千代を契りの松のまどに、

○東の花

吉野よく、見ま人の、不知、花の東の、隅田川、よよぬ春の、ひとりをや、みやことりよ、事問ひし、昔まはよを渡し守、春ま暇無く、みなれざは、指して、堤を行き通ふ、八乃袂、のわけみどり、柳の糸に、引かれ来て、長き日暮らし花の香を、袖よしめてはくみかはし、遊び戯れつ、たをやめの、歌ふ一トふし、ゆみお

らは残りし袖のうつり香を如何に定めむ。咲きよふ花の手枕ら。夢ならで。かひすもあだの。花の影。流石嬉しき。ゆかりまも紫さきおふる。武藏野の。廣き恵みや。仰ぐらん。尙行末も千代八千代。長き堤の花櫻ら。榮へ榮へん。御代の春。

○長恨

今の昔し。唐しに、色をおもんじ玉ひける帝。おのしませしとき、楊家乃娘め。かしこくも。君に召れて。朝さおれの。御寵みあさからせ。常にかたはらに侍りぬ。宮の内のたをや女三千の寵愛も。わが身ひとつの。春の花。ちりていろ香も。亡き魂の。ありかを尋ね。みなれざは。さしてはるく行く舟に。法士は浪の、うささねする。常世の國に。来て見れば。樓閣玲瓏とえて五雲れこり。うちになまめく。女乃童ことにすぐれて。玉眞の。

すがたはいづれ、李花は一枝。あめを帯びたる其の氣はひ。見
 るよりそれと。おと乃はも。涙こぼれて欄干らんかんをひたすもいかに
 なれ染し。驪山の昔々。思ひある。あらなつかしの。都人。はづ
 かしながら。在し夜の。其のむつごととも梢へいつる。露のちぎ
 りの。うさはらし。云ふてみよならひとかたに。御思召すかや。
 深き江に。春の氷の。薄さはいやよ。思ひ逢ふよは。うち解て。
 寢みだれ髪を。其まゝに。とりつくるはぬ女さを。かあわがら
 んせからすバの。色に此の身を染め糸の。結びめかたき。かた
 らひも。縁つさぬればいたづらに。またこの暎よ。かへりきて。
 尙なつきしき。古へを。思ひいづればあはれなる。驚破おぼろ霓裳羽
 衣の曲。まれにぞかへす乙女子が。おれににぞかへす女子が。
 袖うちふりし心しりきや。さるよても。君には此の世。あひみ
 んことも。よもぎの島つどり。うきよなれとも。變しやむかし。

變しや昔しの物がたり。つくさば月日も。うつりまひの。しる
 しのかんさし。たまひりて。都みやこにかへる。家づとの。ふみにもま
 さる。ふみ月の。七日のよはの。私語さいご。ひよくれんりも。いまは
 はや。かれくになりし。うきちぎり。天のどこしのなへなるも
 つちの久しく。ふりぬるも。つくるときあり。此の恨み。綿々めんくわ涙
 々としてたるまなく。今よのこせし筆のあと

○櫻がり

長閑なる。頃もさささぎ。をしなべて。見わたす山も。うちけむ
 り。柳のいとのあさ縁り。春のにしきかあやなくも。都ましら
 ぬ。まらやもの。たてるやしるべ。櫻狩さくらばり。人のまゝも。あま
 かる。そらを見すて。こまちよは。まつらむものを行鷹やくかりの。
 かはるく。翼は空よさへ。聲のあはれに。聞ゆなり。行衛やくへした

ひてたちとやり。なこりはししわすれねど。初花ぐるおめぐ
るひの。ながへつらねて。見ずもあらず。見もせぬ人や花の友。
しるもしらぬも花の影。あひやどりして。すがのねの。長さ春
日も。いたづらよ。日影ぞどきて。花ごろも。おれきたもどけ。
香にそみて。野邊も。山べも花ゆへに。いたらぬくまは。なけれ
ども。山の。やまの。いわねを。どめて落る。干すぢ白らすぢ。佐
保姫の。手びきの糸の。たきなくは手折てゆかんいりあひの
鐘よりさきに。春霞たちおかくまそ。風と吹とも。

○芙蓉を詠する歌

おまろなる。たか根をはるの。さくら花。さくやひめとは。かみ
よの古玄。神代も花のいろさかり。花のすがたはいとしらし。
しんぞいとしらし。いともかしあき。人のよよ。ふしもすぐあ

る竹取の。翁のむすめのよいむすめ。みがさたてたるかつらの
おゆよ。かはりてりうふ。秋はよ乃月にかこちて。ぬるさどと。
戀ひしかるやつしたふやつ。やつとやつとを。指折見れば。二
八十六でふみたおづさを。鴈が持てくる。雲井より。ちらと觀
せたの冬たつ。天に。降り来る雪は。はだじまんまれ觀よかし
に三保の松。羽衣もといふ。迷言かげた。天津乙女は。うはさの
あだか。をどこひでりか。此乃年月を。まづがふせやよ。假り枕
ら。絲も操りひ、いたをりくくに。霓裳羽衣の曲ををし。東まわ
そびの。駿河舞。雨ようるほふ。花は袖。かへすたもとに。充滿
比寶らを普ねく世にふらせ施あしたまふ。いつくまみ、盡ぬ
そはあひ、蓬萊の山、又茲は富士のねの。扇の裾野。末名廣さ御
國の要めと。祝しけり

新体詩歌第三集序

和哥禪於世教。漢詩亦益於德化也。明矣然而。非入其道熟之。則吟之詠之其感情猶與雛僧誦經一般而已。夫俚哥俗謠。童幼婦女。好而誦之者。所謂雖鄭聲導情欲之所致亦是解之易也矣曩者學友竹内氏。有新体詩哥第一第二集之編。今又以所輯第三集。示余。受而誦之。其說不高。其調不卑。苟。通儘々普通之文字者。悉得誦之解其意也。而句々慷慨盡忠。章々友愛貞節。使其感動人心也深矣。余謂。以此詩哥。易彼俚哥俗謠。令人々誦之。則其志氣自昌。其情性自和。而遂移風。易俗亦非難也。因聊記之。以表感情之一端云爾。

明治十六年癸未二月上浣

雨軒 坂 部 識

○西行の哥

われもむかしはますらをの。眞弓つさ弓。としをへて。引きたがへたる朝さ夕と。命ちかりけり。旅衣。おけの衣に。身をそめかへて。心乃ちりの。袖のらふ。やばなせかいに。いとまごの。いとしかあいの。昔まのまど。よのよしの山、こぞのまをりの。道かへて。まだ観ぬ花の。色々を。たづねく。うた枕。ふでのすさみの。墨染櫻。うつろふ春の花乃かは。やせるすぶたよ。かささたなりを。水の鏡よ。かけとめて。まばま立よる。柳かけ

坂部廣貫校閱
竹内 節編纂

左の詩は一千八百五十四年英佛の兩國土耳其を援けて魯西
亞と兵端を開き遂に高名あるクライミヤの戦争となり此間
數多の合戦此處彼處に在りたる中最有名なるもの同年六
月廿五日バルクラバの戦争よく英國乃輕騎兵六百騎が目よ
餘る敵乃大軍中へ乗り込み古今無双の手柄を顯はせられ
も惜い哉衆寡素より敵し難く其大概は討死し或は擒よせら
れ無難に歸陣したる者甚僅よて有りと當時英國に有名ある
詩人テニソン氏が其進撃の有様を吟詠したる者に云て何國
人に限らず苟も英語を解するもの此詩を暗誦せざるはなし
といふ

山仙士

○テニソン氏輕騎隊進撃の詩

其一

一里半あり一里半
死地に乗り入る六百騎
士卒たる身の身を以て
答をあすも分ならず
死ぬるの外有ざらん

其二

右を望めば大筒ぞ
共に打出す砲聲は
響の如く凄まじや
猛り立てぞ進むなる

並びて進む一里半
將は掛れの令下す
譯を糾すは分ならず
これ命あきよ従ひて
死地に乗り入る六百騎

前も左りを又筒ぞ
天よ轟くいかつちの
彈丸雨飛の間よも
死地にあそ入れ鱈の口

勇んで乗り入る六百騎

其三

抜け玉ちる刃をバ
さらしくと輝けり
大砲方をなで切りよ
煙の中へ飛込みて
太刀の早業見事なり
遂にさふる事ならず
馬の頭ぞ立直す
残はいと、僅かなり

其四

右を望めの大筒ぞ
共に打出す砲聲の

彈丸雨飛の其の中よ
死地より出て乗り歸す
歸るは元の一里半
残るはいと、僅かなり

其五

あ、勇はまき武士の
手柄は永く傳へなん
とる年あまた重なりて
頭に霜を戴きさて
六百人の豪傑が
其古事を語りなば

皆諸共に振あげて
敵陣近く乗り掛けて
最と目冷しき働さぞ
烈しく陣を破るなり
敵の軍勢たちくと
群々をつとむら崩れ
以前に進みし六百騎

左りも後も又筒ぞ
天に轟くいかつちぞ

縦横むじん切り靡く
鱗の口より脱れ出て
六百人の其中で

世に香し死其響
今のれさなご生立ちて
腰の梓の弓となり
孫参やしやご多き時
敵の陣へと乗り入れる
末代までも名の朽ちト

○朝貌の花に寄せて學童を奨勵す

小川健次郎

庭にはのかさねの朝がほよ
 咲さきとも盡つきぬ其花の
 同じ天地の恵めぐみにて
 深しき心の白露しろつゆの
 人こそ花に劣せるらん
 負まけぞ起き出て機嫌げん能た
 我身の無事を神に謝しやし
 椽えんや襖あしの拭ぬきさのらひ
 やがて汝あんじの實みも花も

朝あさをくくられたらぞ
 色といひ又形かたちおでも
 我等の目とば慰なぐささむる
 干かをも知しるを寐ねくたる、
 學まなびの兒こよ此花に
 貌かほ打洗うちあらひ父母と
 庭には乃面おもて乃おもてのき掃除さうじ
 怠おこらぬやうつとめよや
 此朝顔あさあほにもまさるべし
 朝あさなくに咲理由や
 白といひ又赤青と
 我等の目をば慰なぐささむる

心理の法や白露の
 人こそ人の甲斐かひをけれ
 疑うたがふならば躊躇ちうちうせず
 精神論や物理学
 化醇の律をあきらめて
 幾いく春秋あきの年月を
 今いまを蓄つばみの汝の身
 勧めて徒に過あやまるなよ
 蓄つばみに似たる學の兒

結むすぶ作用をしてら過あやく
 學まなびの兒こよ此問を
 普通ふつうの學を疾とくく課かへて
 夫おとこから夫と研究けんきうし
 學士哲士と呼ばれたら
 樂たのしき中なかに送おくるべし
 露つゆの散ちる間まも怠おこらず
 花によく似た蓄つばみの兒

○題秋 (西詩和譯)

早はややさしにけり秋の影
 そよ吹く風かぜは繚ひるかへり

望月秋太郎

庭の木の葉は散ちり
 草屋くさやを圍かこむ垣かきの面の

苦くのあからみいと深ふかき

賤せんの小家せうかの静しずけさと
浮世うきよの塵ちりをよりに見る
時ときつく遠とほき鐘かねの聲こゑ

夏なつの縁みどりも消きへはて、
谷やの氷みづ際に咲さき残のこる
色いろいとさめて哀あはれあり

秋あきの景色けしきとあるにつれ
谷間やまを越こて諸もろ共どもよ
黄昏たごひ時ときよあるまでも

今いまわれ爰あゝ又また唯ただひとり
移うつり傾かたむく日ひ乃すなはち影かげに
猶なほま幼こしに見みゆるなり

移うつりさへ行く夕ゆふ日ひ影かげ
西にしの山端やまはたのくれおひの
黄昏たごひ暗くらくあるおでも

○ロングフエロー氏人生の詩
ろも靈魂れいこんの眠ねむるのは
人の一生いっせい夢ゆめありと
眠ねむらにや夢ゆめは見ぬ者ものぞ

千ちひらの金かねも勝かるるあり
此こゝかくれ家いへも聞きゆるり

山やま々々深ふかし秋あきの色いろ
小こ草くさの華はなの紫むらさきも

時ときは來きにけり去年こぞ迄までは
登のぼり遊あそびしあの山やまに

待まちてとも更さらに聲こゑをせて
健たげく幼こちさ面おもさしの

獨ひとり佇たふむ戸との外そとに
色いろもいめしか消きうせて

、山仙士
死ぬと云いべき者ものぞかし
哀あはれなふしで歌うたふなよ
此こゝ世よの事ことは何なに事ことも

夢と思へど左よあらむ

人の一生夢なむ
人の終は墓なくも
土より來り又土に
そりや靈魂の事ならず

此世は在りて樂むも
世よ有趣意に有ざらん
日毎くおこたに怠らむ
功を立ねばならぬぞよ

光陰實に箭の如く

心は如何に猛くとも
送葬太鼓打つ胸は
最とも哀れに響くらん

此世の中は戦争ぞ
人に生れた甲斐もなく
あもむ羊や牛たるを
功名手柄あすべさぞ

如何に樂しく思ふとも
如何に嬉しく有める共
働くへさの現在ぞ
胸の心と天乃神

最と慥かある事ぞかし
墓よ埋まるものならむ
歸ると云ふの肉体ぞ

又苦しむも因と人の
生るは役に立つ爲ぞ
今日の今日丈け一日の

藝道最とも易からむ

墓あく進む葬禮の
音止めさたる太鼓の音

其戦争の中に居て
人よ使われ追われつ、
人に劣らむ憤發し

未來のあてにす可らむ
過去は昔しに過し事
其働を見る者は

豪傑輩の一生を
生きて甲斐なき者成ぞ
稀ある響得るあらば
永く傳へて残るらん

熟ら思ひめくらせば
人に勝れし手柄して
名の香しく後の世に

其香しき名を聞かば
艱難辛苦の浪風よ
助け船さへあらしぬ身を
功名遂ぐる者あらん

社會の海に乗り出して
吹廻されて破船して
氣を取り直し憤發し

されば人々怠たる者
運命如何よつたあきも

暫時も猶豫するなかれ
心を落すとあかれ

撓まむ止まむ自若と志
勤め働くとをせよ

功名手柄なしつゝも

○ロングフエロー氏兒童の詩

尙今居士

來れわらのべ傍はらよ
我等が多年苦みて
忽ち解けて露ほどの

汝か遊ぶさま見れば
なほとけさりし疑の
曇りも胸に止まらず

汝が遊びたはるゝを
窓打あけて日に向ひ
清く流るゝ川水に
流るゝ水も鳥の音も

見るは恰も東なる
さへづる鳥の聲聞て
臨むが如き心地せり
照らすあさひも汝等の

心の如くゆたかなり
かなしき秋も過去りて

されど我等の心中の
寒き雪霜ふりにけり

童はへ無くば世の中は
童はべ無くば我くの
前を望むもうばたまの

如何に苦しきとならん
後ふり向も憂さのかり
闇の夜中に異あらず

知らずや茂る森の木は
清き空気や日の光
善き汁液を造り成し

いと美はしき緑り葉に
其作用を施して
幹と枝とを養ふを

知れよ閑けき氣候をい
幹にはあらで軟かき

うけて早くも感ぜるの
緑の葉にてありぬるを

森を此世にたとふれば

葉は童はべに比ふべし

來れ童はべかたはらに
花に戯き啼く鳥も
如何なる事を告るやを

のどけき天を吹く風も
汝が清きこゝろに
我耳近くさ、やけよ

思慮を巡らし智を竭し
我等が書ける文とても
汝が面の樂しさに

我等が成せる業とても
汝が様のかとゆさに
比ふるとのあるべきや

人の賞する詩や歌の
完全無虧の汝等に
汝の生ける詩歌なり

世は數多くあるなれど
及ふべき者あらむかし
他は皆死にし言葉のみ

○社會學の原理に題す

宇宙の事、彼是乃
規律の無き、有ぬか
微かに見ゆる星とて
云へる力のある故ぞ
又定おれる法ありて
且つ天体の歴廻せる
必き定まりあるものぞ
地震の如く亂暴に
一に定おれる法あり
地をいふ虫や四足や
其組織より動作まで

別を論せ、諸共に
天に懸ける日月や
動くは共に引力を
其引力の働は
猥りに引ける者ならず
行道とて同じと
又雨風や雷も
外面は見ゆる者とて
野山に生ふる草木や
空翔けりもく鳥類も
都て規律のあるものぞ

又万物は皆共に
あらざる物は無どかし
別を論せ、諸共に
遺傳の法で子に傳へ
適せぬもの、衰へて
桔梗かるかや女郎花
牡丹に縁の唐獅や
木の間に囀る鶯や
雲井に名のる杜鵑
友を慕ひて奥山に
譯も分りて貝の音に
羊に近き猿のまだ
靈とも云へる人として

深き由來と變遷の
鳥けだものや草木の
親も備へる性質は
適するをの、榮へゆき
今の世界に在るものは
梅や櫻や萩牡丹
菜比葉に止まる蝶々や
門邊にあさる知更鳥や
同じ友を呼び子鳥
紅葉ふみわけ啼く鹿や
追ひれてあゆむ牛羊
愚なとよ萬物の
今の體も腦力も

元を質せば一様も
積み重なれる結果どと
見極めたるは是ぞこれ
優すも劣らぬ脳力の
是に劣らぬスペンセル
化醇の法で進むの
動物而已にあらざして
活物死物夫而已か
區別は更になかりしを
感ぜるも尙ほ餘りあり
思想智識の發達も
社會の事も皆都て
既よをのせる哲學の

一代増よ少しづ、
古今無双の濶眼で
プリストーリートル、コウトンよ
グルウキン氏の發明ぞ
同じ道理を擴張し
まのあたりみる草木や
凡そ有としあるもの
有形無形夫れくの
眞理極めし其知識
されバ心の働も
言語宗旨の改良も
同じ理合のものなれば
原理の論ぞ之よ次ぐ

生物學の原理やら
土臺となして今更よ
書にものさる、最中ぞ
そも社會とは何も乃ぞ
其結構よ作用に
種族と親と其子等乃
男女乃中の交際や
取扱の異同やら
違ひ乃起る原因や
其變遷乃原因や
智識美術や道德の
遷り變りて化醇する
論述ありて三卷の

眞理の學の原理をば
社會の學の原理をば
此書に載て説かる、は
其發達は如何なるぞ
社會の種類如何なるや
利害の異同如何あるや
女子に子供の有様や
種々な政府の違ひや
階級社會のある故や
儀式工業國言葉
時と場所と乃異同よて
其有様を詳細よ
長さ文にぞせらるべき

最も目出度美舉にこそ
讀たる者は誰ありて
實に珍敷しき良書なり
何から何とせわをやぐ
走り書やら空しやべり
天下の事の一と飲みと
新聞記者や演説家
人をあやめる罪とがの
月日乃事や星の事
夫等の事いさて置さて
疊一枚させばとて
長の年月年季入れ
出来る事にい有ざるに

既に出てたる一卷を
此書を褒めぬ者どなき
社會の事よ手を出して
責任重き役人や
舌も廻らぬくせにして
法螺吹き立て利口ぶる
此書を讀て思慮あさば
少しと減りも爲ならん
動植物や金屬や
凡る天下の事業の
足袋と一足縫へばとて
寝る眼を寝るに習ねば
獨り社會の事計り

年季も入らむ學問も
新聞記者や役人と
箇様な者が多ければ
尙ほ恐ろしき虚無黨の
操めに操めたも其上句
秩序も建たず自由なく
再び浪風静まりて
百年足らず掛らんは
有様見ても知られたる
妄も手出しそる勿れ
廣き世界の其中も
盲目同士の戦に
峴ひさまらぬ棒打の

そるに及はぬ譯なきに
成は最と最と易ければ
忽ち國に社會黨
起るの鏡に見る如し
虻蜂取らずの丸潰れ
泥海にころなるべけれ
太平會と成る迄は
革命以後の佛蘭西の
ろこに心が付きたらば
妄もしやべると勿れ
恐るべきもの多ければ
越したる者の有ぬかし
仲間入りころ危ふけれ

今の世界は旋風つむじめ
 烈しき中へついで一寸
 足も据たはとらず瞑眩めくらめさ
 廻まはくくくと廻まはされて
 上句あひくのはての空中へ
 初て悟る其時は
 後悔先さよ立ぬなり
 其吹く中へ過あやまちて
 上手よろんところは云べけれ
 輿論よろんを誘よそふ人たちは
 能く慎つしみて輕卒よ

烈しく旋める時なるぞ
 絡まき込まれたら運うんの盡つき
 頭かぶのいとぐら付つきて
 透そま間も非まぞ廻まはさきて
 絡まき上あらきて落おさきて
 早はや遅おそ時まの唐たう椒あらし
 颯さつ風烈しく吹く時の
 船ふねを入れぬが楫かぢ取とりの
 政府の楫かぢを取る者や
 社しゃ會かい學がくをば勉強べんきやうえ
 働はたらかぬやう願ねがえやし

○遊墨水歌

飯田武郷

隅田川堤すみだがはの櫻さくら咲さみたれ。みたる、盛さか咲りはほひ。匂におふ遠とほ近ぢか稍ちかに
 の雲うみをなひかし木陰こかげには雪ゆきころつもれ見渡みわたの筑波つくはの山やまの春霞はるあせ
 かすめる空そらには光ひかりくと半はんみへそ水みづ上の舟ふね乃なほ帆影ほかげははなれ
 て洲しづを早くはなれて目の前まへ近付ぢかにけりとりよるふ。氣色きしきを
 見ればよる波なみの音ねものどけく行水ゆきづみの。かけも静しずかに自心こころれち
 むくれをしろみ。遊あそぶ此日このひの暮くれともあふぬか
 皆人みなひとの心こころひらけて隅田川遊あそぶ盛さかりを花はなもみるらん

○詠和氣清麻呂歌

久米幹文

八隅やとみし、和氣大王わきおおうの見みしたまふ御夢みゆめのひまにか濁にごる。弓削ゆげ
 の川波かみれはけなく。逆さかのほらひてあぶぎみる高坐山たかざやま比ひ高峯たかみねを
 もひたし汚よごせは。此世このよは海うみにやならむ人ひと皆みな魚いさなよやなると天あま
 の下した。なけかふはしに廣幡ひろはたは八幡やっぴんの神かみの神憑かみたより我國わがくにはしも天あま

地の始の時ゆ上下乃。ことわり正し。くなたふれ。穢きたかさも此の
 神かみ逐おひ。やらひすて、よ打罰とがめ拂はらひそけよとた、告つに。のらし
 給へき大御言。いた、く臣のねほれお事も思はせ沈しづまむ身を
 も忘れて畏おそと歸奏きそうせば。長いのみ夢ゆめば覺さめて惱あやましきみ心こうせ
 め逆卷さかまく水速すみけれと。立騒たかさわく波高あみなけれと。大御稜威おほみりに争あひかねて
 末終すえよくたり落たり其臣の。功は高く其臣の名さへさやけく
 後世の。鏡かがみにせむと稱め給ひ。治めたまいて神とさへいはひ奉
 らす事の尊たかとさ
 君きみころの水附屍みづのへと弓削川ゆづりがわの逆卷波さかまくみをた、渡わたりつれ

新体詩歌第三集終

新体詩歌第四集序

余嶮谷竹内氏ト始メテ湘川ノ澚リニ相逢フ同居スル數月タリ
 一度袂ヲ別ツテヨリ爰ニ三年復ヒ東都愛宕ノ麓ニ邂逅シ手ヲ
 握リ膝ヲ交ヘ相語リ相問フ一數刻タリ氏其編スル處ノ詩歌第
 四集ヲ以テ余ニ示シ且語テ曰ク凡ソ人喜怒哀樂ノ感情慷慨悲
 憤ノ氣焰苟モ其腦裏ニ充溢セル者ハ或ハ是ヲ詩篇ニ漏ラシ或
 ハ是ヲ歌章ニ詠シ以テ能ク人心ヲ鼓舞シ又能乾坤ヲ感動セシ
 ムル者古今其例少ナシトセズ然レモ今我國ノ風俗ヲ見ルニ詩
 歌ハ殆ント操觚者流ノ玩物ノ如ク文人墨客ノ一遊戯ノ如ク然
 リ其之ヲ爲ス者モ亦徒ニ月ニ吟シ花ニ詠シ殊更ニ奇語ヲ綴リ
 テ雅致ト稱シ人事ヲ離ル、ヲ以テ快樂トナス又嘆ナラスヤ又
 遺憾ナラスヤ今此編ノ如キ其語ハ俗其詞ハ易故ニ牧童モ以テ
 誦スヘク機婦モ以テ讀ミ易カルヘキナリ然リ而又其喜怒哀樂

ノ情ヲ詠シ慷慨悲憤ノ氣焰ヲ漏スコトハ彼ノ章々文ヲ成シ句々
調ヲナス漢詩和哥ニ讓ラサルナリト余卷ヲ開キ默讀スル數章
乃チ鉛筆ヲ舐リ其語ヲ録シ以テ贊成ノ意ヲ表ス

明治十六年林鐘下浣

在東都

斗墨柳田識

新体詩哥第四集

竹内節編纂

坂部貫校閱

我邦ニ於テハ西洋ノ詩哥ヲ翻譯スル人甚ダ少ナシ蓋シ其趣
向ノ我詩哥ト同シカラザルガ爲メナルベシ又適翻譯スル人
アルモ之ヲ支那流ノ詩ニ模擬スルガ故ニ初學ノ輩ハ解スル
ト能ハス余之ヲ慨スル久シ以爲ク西洋人ハ其學術極メテ巧
ミニシテ精粗到ラザル所ナシ其詩哥ニ於テモ亦之ト均シク
能ク景色ヲ摸寫シ人情ヲ穿テ讀賞ス可キモノ多シ且ツ其句
法萬種ニシテ韻ヲ踏ムモノアリ踏マサルモノアリ緩漫ナル
モノアリ疾急ナルモノアリ其語勢ノ變化殆ント捉摸ス可カ
ラス而シテ其言語ハ皆ナ平常用フル所ノモノヲ以テシ敢テ
他國ノ語ヲ借ラヌ又千年モ前ニ用ヒシ古語ヲ援カヌ故ニ三

尺ノ童子ト雖モ苟クモ其國語ヲ知ルモノハ詩哥ヲ解スルヲ
得ベシ加之西洋人ハ短キ詩哥ヲ好マザルニハ非サレトモ亦
長篇ヲ尙ヒ尋常ノ日本書ノ如キ薄キ冊子ヲ以テスレバ一篇
ニシテ十餘冊ニモ上ルモノ少ナシトセズ頃口學友某々氏ト
相謀リ吾人日常ノ語ヲ用ヒ少シク取捨シテ試ニ西詩ヲ譯出
セリ余素ヨリ詞藻ニ乏シト雖モ既ニ譯シ得ル所數篇ニ至ル
ヲ以テ今其一ヲ舉ゲテ江湖諸君ノ高覽ニ供ス幸ニ其詞藻ノ
野鄙ナルヲ笑フナカレ

尙今居士

○虞禮氏墳上感懷此詩

山々かきみいりあいに
徐々歩み歸り行く
漸やく去りて余ひとり

鐘のなりつ、野に牛の
耕へす人もうちつかれ
たそがれ時に残りけり

四方を望めは夕暮の
唯この時又聞ゆるの
遠き牧場のねやよつく

景色はいと、物寂し
飛ひ來る虫の羽の音
羊の鈴の鳴る響

猶其外又常春藤しけき
近よる人をすかし見て
訴へんとや月又鳴く

塔は宿をるふくろふの
我巢はわたを爲す者と
いと哀れにも聲すなり

かしこにの楡又こゝよ
其下かけにうつたかく
坑に埋まれこの村の

あら、さ乃木が生茂る
苔むす土乃覆ひたる
古人長く打眠る

軒のき乃つばめ燕つばめ鷄にはどり
朝あさほら朗あさほらけにるなりぬれバ
冥よみち土よみちの人は比ひ眠ねをバ

死にたる人の果敢あきよ
妻めづのよなべも誰たれ爲なめぞ
爺おやぢの歸かへりをよるこびて

曾かつてこ比ひ世よ居いし時ときは
山やまも畑はたけも其その鋤あよ
繁しげれ乱みだ森もりも其その斧きりよ

功名こうみやうとても浮雲うきぐもの

この古人ここのこじんの世よの益えきと
詫わづまき妻つま子の暮くれしをも

富貴門閥ふきもんぼくのみななららず
浮世うきよの榮利えいり多おほけれと
草葉くさば乃つゆ露つゆもれろかなり

苔こけに埋うもれし古人こじんの
餘あまりままゆき屋や乃な内うちに
樂器がくきの音ねを聞きそとも

ひつつき肖像しやうざう美みを盡つくし
一度いちどひ絶たえし玉たま乃な緒おと

九十二
木こ魂たまに響ひびく角うたかへ笛ふえも
囀あまひすしくはありつれと
覺おぼすところななかどどけれ

身みを暖ぬむる爐いろり火びも
愛あいるわらへかかたとに
小こ膝ひざもすかる事こともなし

麥むぎも小麥こむぎも其その鎌かよ
手て荒あき馬うまも其その鞭むちよ
任まかせて君きみか儘ままなりき

過あるか如ごときものなれば

骨折ほねおするも不運ふうんをも
笑わらふべきにい非ひすかし

みの美うくしき乙女子おんなや
いつか無常むじやう乃な風吹かぜかは
黄泉よみぢに入る乃な外そとをなき

墓場はかばの上うへ寺てらを建たて
頌歌しやうかの聲こゑも合あはすある
身みの不徳ふとくとな思おもひらよ

人の尊敬そんけい多くとも
繼つぎ留とどむべき術わざのなし

詔らふ人のほめ言も

考へみれば廢れたる
世に優れたる量ありて
詩文比才も多けれと

學び乃海の廣けれと
心乃性の賢しきも
世の譽れをの聞ずして

深き水底求むれば
高き峯をの尋ぬれば
千代の八千代比昔よと

實は此墓に埋もれて
詩は拙くもミルトンよ
シロムエルに比ぶべき

議院の議士を服さしめ
國の安危を身よ委ね
此等の業はれしあへて

恵みと廣く及ばねど
不徳もいとど少なしや
民を惱めて利をあみす

長き眠の覺すまし

此古塚の古人も
國を治むる徳を具し
顯れすして失せける歎

渡る船路と知らされは
身の賤しくて貧なれば
空しく鄙も終りけり

輝く珠も有そかし
馨る本草の多けれと
人に知られで過にけり

業は劣るもハムデンに
國に軍を擧すとも
人比夙やあるならん

人のわざしむ外に見る
高き譽望を民よ得る
古人何をあづからん

又常々のふるまひに
人を殺えて王となり
夢よも見まじ去るとは

誠まことをかかくすそ乃言に
且つ巧たくみみなる詩丈もて
是の都の弊をれど

此所に生れて此所に死に
其身は澄きよき蓮はす花
實いざ厭いとふべさ世の塵ちりの

されど收をさめし屍しかばねからの
建たてし石碑いしの今もあり
醜みにくしとてもたび人の

碑面ひめんに彫ほる名に年齢としごころに

耻はぢるを忍しのぶ心の苦
富ふ貴きに媚こみる世乃習
未だ此地に及およばさむ

都の春を知らざれば
思おもひは清きよめる秋の月
心に染しみし事をあき

記しる之の爲ためと側近そばぢく
文ふみの拙つたあく彫ほりざまの
憐あはれを争いで惹ひきのざらん

記し、文字の拙つたあくも

記念の功は有ありかし
文句を引ひてえりたるの

蓋この之此世に生れ來て
別わかれ乃惜おししき事こともなく
心こころの外ほかに打捨うちて、

眼まなこの光ひかりり止とむとさ
魂たましひ体たいを去いる時は
たどひ焼やくとも埋うむ共

偕とも又此このよ古ふる人の
いつか歸かへらぬ旅たびよ立ち

又有またかたき經文きやうもん乃
人に無常むじやうを諭さとす爲ためめ

程ほどなく死しする其時に
浮世うきよの花の榮さかるをい
去い行く人のなかるべ之

戀こひ之かるらん身の族うぢ々
痛いたく慕こはん妻さい子ことも
人の思おもひば消きぬはせ之

謂いれは書かけど余あとても
過あぎ行く後の世の人の

如何せしやと思ひやり

しからん時は此先の
老人斯くぞ曰ふならん
昇る旭を見はやとて

又彼處ある川端に
蟠かよりたる根の側より
流る、水より打臨み

又彼處なる常葉木の
頭より傾け腕を組み
といかぬ戀の口惜しさ

去るに一日は彼の人を
絶て見る事おかりけり
野にも森よも川邊よも

又其次の朝はらけ
正しく彼れの爲なりき
彼の山椀の陰にある

碑文

土に枕しこの下より
富貴名利もまた知らず
衷れ此世を打捨て

尋ぬる事も有ならん

頭より霜を重ねたる
我儕の彼れが朝早く
岡より登るを常に見き

枝伸ひ垂し山毛櫸の木
身を横たへて晝いこひ
其常なきをかこちてん

木立の下にさまよひて
知る人なきの歎かえき
世のうさ杯を啣ちけん

慣れし岡よも樹陰よも
其翌朝になりぬれど
身をい現はす事うなき

しかばね送る歌さけバ
君の字を知る人おれバ
碑文を讀みて識り給へ

身をかくしたる此人は
學び此道も暗けれと
あの世の人と成にけり

仁惠深き人なれば
憂き人見れば涙くみ
獨りの友の有まよ

是より外も此人乃
尋るとても詮はなし
後此望みをいたさつ、

○小楠公を詠せるの詩

嗚呼正成よ正成よ
黒雲四方にふさがりて
悪魔の天下を横行し

慢どり果て、上とせむ
絶る間じんばのなき人馬の音
芳野の山に花見むと

君が御世こそ千世々々
いづれの時に有なるや
嗚呼大君の御爲に

この世の塵と洗はむと
遠くあちたを見渡せば
雲む上まで屹立し

天も憫み報ひけり
(外に詮すべなき故よ)
(外に望はあかるらん)

善し悪し共よなほ深く
たましひ既に天よ歸し
神かみにまぢかく侍るあり

公の逝去せいきよのこのかたは
月日も爲に光りなく
下を虐げ上をさへ

吹き來る風は腥ぐさく
春は來れども花咲かむ
訪ひ來る人の絶てなく

囀る鳥此聲聞は
嘆かはしきの至りなり
振ひ起りてけがれさる

する人としては非ざるか
金剛山は巍峨として
繁る林の木の間より

見ゆる菊水の其旗は
父の賜ひし此刀
賊の頭らを斬らせむ爲

實にこそ國の寶らなり
腹をされとの爲あらむ
憎さもにくし彼の賊等

國の仇あり父の讐
拂へば來たる夏の蠅
熟ら思ひめぐらせは

斬て捨ずよ置くべきや
頃と正平戊子の春
元來よわき此からだ

若しも病又冒されて
不忠不孝と誹しられむ
死出たなごりに今一度
君の御影を伏し拜み

空しく失せし事をらば
討死するは此時ぞ
願ひかきひて親面たり
生て飯れのみことたり

聞て切ある宵のうち
書き残したる梓弓

哀れといふも愚あなり
引きてかへらぬ赤心を

誓ひし者は百餘人
物ともせむよ斬まくり
討死せしはいささよく

雲霞の如き大軍を
君の方をば枕して
勇しかりける事共なり

都も遠き村里の
忠臣孝子の鑑ふと
天地と共に傳はらん

女わらべ又至るまで
響る其名は香しく
天地と共につたはらん

○代悲白頭翁歌

都の錦桃櫻

大竹美鳥

花の色香の日にそへて

移ろゐて行く乙女子が
露の命の果敢あさを

散り行く花を打眺め
かこつもいと哀なり

暮れ行く春に花散りて
眺め見あかぬ我心
花の今年も變らねど

木々の梢は縁りしぬ
又來ん春を思ひやる
身の行末ぞ忍ばる、

常葉の松も柳人が
賤が伏家の薪なり
青海原にありきてふ

斧よふるれば忽ちよ
桑の畠も年ふりて
事さへ人の云ふぞかし

過にし春の曙に
今もてのやす諸人の

花見し人ぞ今はなき
行衛も知らぬ花の風

風を怨みて中々に

身比古行くを思はざり

春毎に咲桃櫻
今年も去年に變らねど
今年も去年より古にたり

色も同しく香も同し
變るは人の姿なり
又來ん春は如何ならん

如何にわくらは言告ん
花の顔月の眉
哀れ翁にありまたり

我も昔しの汝が如き
今と頭に霜れきて
哀れ汝も亦心せよ

幼けなかりし其日に
戯れ遊ぶ舞の袖
光り輝く高樓に

木の下影にうちむれて
風に散行く花の色
天津乙女の歌ひして

樂しく暮す月と日の
昨日の淵を今日みれば
病の床にふし柴の

流きそ早き飛鳥川
瀬に變りゆく我姿
戸ほろを叩く人うなき

花は顔月の眉
緑の髪を今日見れば
頭は白く青柳の

うつろゐてゆく世の習
越の國たる白山の
腰の梓の弓なれや

過にし事を今更に
千々に物こそ悲しけれ
時よ歸る村雀

思ひ出れば中々に
入相告る鐘の聲
實に常なれば世の習ひ

○寒村夜歸

小川健次郎

草木も眠る丑三を
遠寺の鐘は音凄く
我を襲へる九折つらざり
洩來る月の片われは

なれし道とて只ひとり
小笹を渡る夜嵐の
登るも暗らさ杉村を
何地なりけん梟の

聲より外に友もなし
住めば都の闇がしき

斯る淋しさ土地なれど
車の塵もかゝねば

権貴けんきの門にへつらひて
まけぬ重荷を負ひ擔かき

名利に追はれ牛馬に
我と我身に使はる、

苦痛のしづで春の花

夏は螢や郭公

秋の鹿の音月雪と
我もの顔にめてあそぶ
自らゆるし友も亦
貴人も知らぬ快樂の
暈へは返す谷の山彦

四時たりくの景物を
身は昭代の棄材そと
瓢一ツに王公や
多き此身を神に謝し

○西詩和譯

太竹美鳥

此詩原ブレットハートノ作ニシテ僅々三章一百字妙味蓋シ
言外ニアリ今之ヲ譯ス譯語ノ拙ナルヲ以テ原詩ヲ推ス勿

暴風よ雨を吹きよせて

最すさまじき聲すあり

海面さこそと思はるれ 岸うつ波の音高き
今日の漁業休みなん 嗚呼畏ろしき聲斗り

右一章

獸の踪を尋ねんは 谷間に嘯く虎もあれ
岩間に哮る獅子もあれ 嗚呼畏ろしき聲斗り
今日の山獵休みなん

右二章

海よ幸ある舟子ども 山に幸ある獵男ども
市に歸ればこの如何よ ささの地震に家つぶれ
此所も彼所も怪我人の 嗚呼畏ろしき聲斗り

右三章

○詩史

武士の石するるとしもた、へつ、其名かれせぬ楠の木。やま
と心のくもりなく。君につかへて國のため。あかさか山にたて
こもり。あるの千草も吹をろす。をろしの風にかたきらひ。た
まりもあへず散々と。散行さよけりつかの木。いやつき
くくにうちよせて。又引かへし攻め來れば。今はかたりに死な
はやと。心極めて櫻井の。里にかはる言の葉を子に教へつ、
のこし置。其身はやかてつはものを。うちしたがへて湊川を
をふかみで赤心。に謀りし事もあわとあり。消えて戰の敗れと
る。豫てかくそと空に満つ。倭心は三吉野の。花と散てし憐
さを。早くも仇の傳へ聞き暫時しまとるも夢をさへ。驚かなん
とむらさめの心をつきて君が爲。盡す心はたもみなく。家に傳
へしみとらしの梓の弓のなきかすに。いるてふ事を記るし置。
吉野の山よかはれるも。實にたくひなき丈夫の。親子のらから

のこらさも。國を枕まくらになしてける。赤あかき心を今も世に傳つたへ聞く
だに身もさふく。なりにけるかも適あてひれますらを。

反歌

古しへをさしくまれけり湊川

世に流れぬる名を慕ひつ、

世を経つ、朽せぬ名こそ楠の

石とありぬる記しなりけれ

元治のはじめの年都みやこ事ありしより此このかた公のねはん爲ために
命いのちうしなひし人々の祭り行ふとて讀よめる

從三位毛利元徳

○吊忠魂歌

か、なへて。過にしかたの年よめは。十あよりみつのうのかみ

此。空よあやしき雲起り。大内山を立てめて。光りさやけき天
 つ日を。ねほひ曇らしとあやみと。なせる歎き我いへに。つ
 かへしもら赤心よ。ねもひ計りて。もとかしり。もとれとくよ
 九重に雲井此空をさやかよめ。拂ひてしかと言たて、うち出
 しも乃を其こと乃ならずてつひにそ乃人も。都乃野べ乃しら
 露と消にけりかめ。う乃身はま。さへ果ぬれとはともなく其人
 とも乃はかりつる。事乃如くよいままへよ。大まつりことかへ
 りつる。もとをたとりてあわれく此人とも乃大君乃ねほみ
 ためろと玉さはる命捨にしゑたちより。なれりともへ己れ
 らか。かく明らけき大御代乃。みいつくしみよあふまとも。こ
 乃人とも乃國乃ため。乃こし置つるいさをしと千歳乃乃ちに
 かたりつかまし

反歌

雲晴てさやけくなれる天つるは

あふきもあへす失し人はも

あた波をかへしもやらて徒らに

屍ねみつぎし人ぞかなしき

新体詩歌第五集序

形象粲然皆ナ寫シ出スベキ者ハ玻璃鏡ノ巧ナリ清濁ノ音互ニ和スベキモノハ大筒琴ノ妙ナリ夫ン玻璃鏡ノ寫大筒琴ノ和巧ハ則チ巧矣妙ハ則チ妙矣然リト雖モ長ク其ノ形聲ヲ留ムル者ニアラサルナリ今ヤ二者ノ巧妙ヲ兼テ數千百歳ノ後ニ垂レテ而滅絶セサル者アツテ存ス焉其唯詩歌カ紀伊人竹内君洋ノ東西ヲ問ハズ時ノ古今ヲ論セズ諸名家ノ詩歌ヲ網羅シ嚮キニ既ニ四集ノ編アリ命シテ新体詩歌ト云フ頃ロ又第五集成ル卷ヲ開ケバ則チ燦然熒然シテ以テ目ヲ悅ハスベキ者アリ鏘然鏗然以テ耳ヲ娛マシムベキ者アリ千様万態一ニシテ足ラス其他聲律ニ應ジテ而性情ヲ寫ス如キニ至ツテハ能ク鏡琴ノ寫ス能ハサル所ヲ寫ス者而喜怒哀樂不平無聊ノ意見ハル焉玻璃鏡モ其ノ巧ヲ賞スルニ足ラス大筒琴モ其ノ妙ヲ擅ニスル能ハス詩歌

ノ聲形百世ニ傳ヘテ而益高明ナラントスルナリ嗚呼後ノ此ノ編ヲ讀ム者魚龍曼衍ノ戯ヲ觀ル如ク黃帝咸池ノ樂ヲ聽ク如ク心目眩亂精神酣暢奇ト稱シ快ト呼ビ樵漁婦女ノ愚ニ至ルマデ皆ナ詩歌ノ樂シムベキヲ知ラン詩歌ノ樂ムベキヲ知ラハ漸盜カニ學ノ門墻ヲ望ムベシ然ラバ則チ此ノ書ノ出ツル天下ノ文運ニ關スル輕カラズ矣其ノ体裁ノ如キハ舊様詩歌ノ解シ難キニアラス極メテ簡易ニシテ皆其ノ趣キヲ新ニシ別ニ生面ヲ開テ人ヲ責表ニ出ツ名テ新体詩歌ト云フ固ヨリ其ノ異レリ矣序ヲ徵スルニ及ビ再三辭スレドモ得ズ終ニ書シテ以テ其責ヲ塞グト云爾

于時明治二八歲癸未八月中浣

蜻民 首藤次郎識

新体詩歌第五集

嶮谷 竹内 節編纂

蜻民 首藤次郎校閱

○世渡り乃海

宜も出来たり實りたり
わけて今年は秋穫を
又とあらしを國本も
爰にかゝると聞からよ
すき返しても長き日比
それ乃みならず霖雨や
夜目も寝ず引板乃番
野分乃風乃無患やな

小川健次郎

往來比人も稻乃なみ
見れば農はとよき業は
こゝよ基おし民命も
劔をうりて鋤をかひ
腕も肘も脱けらうに
旱に水乃かけ引や
さるに一日野も山も
泣くよもなけず取分て

外に詮術なかりけり

世乃常なきを啣つより
嗚呼六づかし乃世渡や
物うる業のむかしこそ
國乃光も身乃幸を
非トとさけば矢も楯も
輸出輸入乃平均や
取もとさんと健氣なる
あへなく外れ幔幕乃
賣れば借らば買へば損
さへて果散おき雲霞
世乃常なきを啣つより
嗚呼六づかし乃世渡や
棹一本に浮々と

賤しといへど今乃世の
もとむる道もこ乃外に
のや溜らじと投げ捨て
彼に得られし商權を
胸算用乃正鵠の
設け處か埒もなく
杖と頼みし資本も子も
あらし乃庭乃花紅葉
外よ詮術なかりけり
此所乃泊りや彼所乃港

遊びかてらに渡らるゝ
危険を怯ぢす畏れずに
日頃の伎倆顯とすの
よるべき蔓を求めねば
共に根となさうき艸の
誘ふ人なき身の不運
月に嘯き花に酔
世の常なきを嘆つより
世わたる業の多けれど
つきて廻とる諺の
ねなじ羽色の蝶鳥の
其生活と習ふより
傍目をふらす一すらに

又あすよりと工夫して
其熟練に遺傳とよ
勵み進めばねたづから
一日と樂よ傍目より
嗚呼いとやす世渡や

○夏夜即事

晝乃暑さはゆふ立よ
か、やく月は置わたす
玉を欺く玉たれ乃
いと涼しきむら竹に
疑ふばかりれと細く
千ひら乃金と一刻を

舟子も暴風乃危険あり
名譽乃海に乗り出し
いと易けきと夫とても
よし覚むとも其蔓を
憂き艱難をよりに見て
とり裂く胸を押鎮め
流る、水を友とて
嗚呼六づかしの世渡や
彼に利あれば此に害
畔を走るも田を飛ふも
ねろかな事よ細虫すら
あれし手業を怠らむ
明日けふより明後日は

祖先に立てし計畫と
光りを加へ漸くよ
我をしらむ一日より
羨むこゑを聞く時の

小川健次郎

あらしひ流して峯高く
千草に雪ははら〜と
小簾に返し吹ちりて
葉越よ秋や來ぬるかど
庭に鏡もきこゆなり
惜みし春に宵よりも

猶明け易き夏の夜は
口さかなくも愚かよも
蚤蚊や蠅と打つけに
ねもひを焦す螢火や
しのぶ軒端の橘よ
訪ふ人もなき草の戸を
物乃哀れをゆめにだに
静に觀きば四つの時
われを慰め樂しませ
今日のあたり覺へたほ
つ、そとすれと夏衣

○送學友歸郷歌

五年六年諸共よ
互に勵みはげまえつ
光乃とけき春乃日や
五月雨晴れぬ夏乃日も
いと樂しく過しさり

月日の流れ早くして
昨日諸共住みなれし
明日の旅路に出船の
かしまたち今祝ふあり
いさやほせく其酒を
歌へや舞へや皆共よ

價を誰かさだむべき
夏のうるさし又暑し
賤ていふはいのずして
昔比人の袖の香を
はつねともらす郭公
叩く水鶏にやぶらる、
しらで寝過す人ならん
うつり變りて物ごと
深き方便とゆくりなく
其嬉しさと樂しさを
吹返したる峯乃松風

大竹美鳥

同じ學びの窓の内に
慰められつ慰めつ
月かけ清き秋乃夜や
雪ふりしきる冬乃夜も
いとうれしく暮し息

五年六年とく立ちて
學びの舎を出たりし
ともなり師なる君達乃
祝の酒をす、むなり
いさやくめく此酒を
舞へや歌へや諸共に

今日を限ぞ明日よりい
敵といふと忌言葉
難さも難さ事ならず
聲をば雲井に上るなる

さういへ心有明の
行衛思へばうたてや
朝は淺間の烟りかも
天と地と此間をば
隔てはあらじ西東

同じ圍坐此友人よ
浮世此事は何事も

さりとして心にくらすな
斯くして後に思ふ事
風ふき拂ふ雲間より

嗚呼面白此景色やな
明日此別れ此最つらさ
取れや人々酌や酒此
深に契りを忘るおよ
月もろ共にやすらはず

○見燭蛾有レ感
時しも夏此闇此夜に
東の窓の其下に

又逢ふ事の易さやは
雲とも排く心あらば
月乃前ゆくほど、ぎす
あれ見よ高く上るある

月影かくす村雲此
浮世此事に似たる哉
暮は鞍馬の霞みかも
家とあしつ、過る身の
北も南もみな同じ

雲になやめる月を見よ
思ふま、にのならぬ共

耐へよ忍べよ怠るな
かあふ者とよ見よや人
月は出たり顯のれたり

ろいろうさ立つ思哉
愁を掃ふ玉は、此
つさぬためしも有磯海
寝もあきや今宵一夜
歌へや舞へや明るおで

犬山居士
文書かんとて我庵の
燈とをせば庭の木の

涼しき風を送り越し
いと美しき蝶々の
取らまくぞする有様を
深く心よ藏め置き
抑も難を企め
又其本を見ざりせば
等しき業やなすならん
取まくするは愚ならず
なさまくするは愚なり
其身失せては遂がたし
しめて其身焼をせす
進みて後にはまれ得て
名譽の人と呼バ、れん

百廿四
衣を通し吹くにつれ
繻めき來り燈みて
見れば悟の有りと海
守らんとする事ぞある
悪きとよはあらねども
今しも來たりし蝶々の
焼ても思ふ其火を
死してを難き其事を
其身ありてそ事遂ぐる
されバ撓まぬ心を
死しをなさぬ道をと
後に鑑を殘すべき
名譽の人と呼バ、れん

○湘南秋信

昨日けふと思ひしを
旅よいなれぬ苦しきよ
雲の通路斷えむとを
あすは來よけん友便り
偶よいあれど其さへを
有る者として無りけり
いかよ見物か其とてを
泣よなかれむ兔や角と
知るや知らむや秋の霜
哀れを見舞ふ氣合なり
あると馬入に馬を侶

鈴木券太郎

百廿五
早一月の旅衣
眺むるもの空乃雲
斷えくある文の面
あさては又親や妹
要事のけては何をかを
まいて王子の紅葉たを
想ひやるはみ詮術を
案じ暮すの愚か、も
千州よか、る照月も
木の葉の落る音づれも
またと雨降よ雨よ菰

大和心のやる瀬なき
都比人又玄らきんも
今年のみより豊けさよ
來るや春の事よでも
君が代なれや有がたし
田舎の住居よし然かを
酔て管まく其代り

蜻民評云句精巧押韻自在敬々服々

○チャールス、キングスレー氏悲歌
無常を告ぐる入相の
三人の漁夫の帆を上て
走らす船の進めども

心の中ハ皆同ヒ
沖に向ひてイめる
まうけの薄く子澤山
洲に打掛くる浪音は
稼がよならぬ男は身
三人乃漁夫乃妻三人
鐘もはのゝし聞ゆれば
火を挑んと立寄りて
窓は戸開けて眺むれば
空打過ぐるむら雲の
暴風の如何に吹けばとて
洲に打掛る浪音を

百廿六

思案なげ首池の鳧
外よとあらじ是とそも
民乃命のかゝる紐
嬉しく思ひ云まくも
白さを語る丹き肝
露の恵みの深さに
東京の模様知らせたも

外山仙士

鐘の音するたりがれよ
入る日を指て西の海よ
妻子の爲に引かざる、

父の出船を眺めつ、
童子と外よ餘念なし
雨は降る日も風は夜も
最とそさまじき其時も
袖はひぬれと女子は身
日も西山よ入相は
共に籠り玄燈臺の
つまめる心乃夫思ひ
驟雨やら暴風やら
色黒々と物すごし
水嵩の如何に増ばとて
如何程すごく聞ばとて

稼がにやあらぬ男の身

袖のひぬのは女子の身

朝日 かいやく砂磯に

潮引き去りて其跡よ

残ると三つの屍を

三人の漁夫の妻三人

歸らぬ旅に門出して

歸らぬ夫のなきがぐに

髪振り亂し取すがり

消る計つよ泣き入りて

目も當られぬ風情なり

稼がにやならぬ男の身

袖のひぬのは女子の身

一日も早く世を去れば

一日も早く樂をせん

屍の跡の砂磯よ

寄せ來る浪の碎けつゝ

鳴瀧鳴れよる、儘よ

○詠松嶋歌

遠藤信道

鳥のしも 許多あれども

浦はしを 多にあれども 陸奥の

松島の浦の 鳥がらか 眞細か島

浦柄か 愛さ浦其浦の

小嶋の崎ゆ 打見る島のささく

搔見る 磯の崎ねちを

船浮て 廻らひ見れば 小女の 眉曳をして 寶が崎は 南

へ奔り 鹽尻を 伏たる如く 富山は北へそ、り 西へ空

振放見れば 飛鷹の 大山そびへ東を顧みすれば 宮戸の蛇

雲峯立ち ちちくの 其山の間 百八十乃島ころ並べ

夕煙 霞の浦 淺緑青柳の島の 時自久に春めく嶋か 久方

の月見の崎 茜指桂の島の 常しへよ 秋立島か 火打嶋

附木の嶋は 夏に夜に 海士の焚なる 漁火の残れる影か

風凄る寒風澤に湍と 浪騒ぐ龜嶋磯の 嵐吹 冬の餘波か

玉手箱 二子の嶋は 二並び 陸しみ見ゆ 丈夫の 鎧の

島 武夫の兜の嶋の 彌猛く 雄々しくみゆ 腰細の天女の

島 白髪附翁の島は 宜しけく 向ひて居れり 八千矛の

大國島 鯨釣夷が嶋は 兄弟はらわらか 並ひて立り竹の浦來よる白
 玉 福浦ふくらこいよる 玉藻を 深あか海松の拾ひてあれバ 潮垂しほた
 る苦屋の汀あざさ あひしとむ 海人あまは思はむ 盗人あしと人は雖言いへごと
 崎みれバ 豊ゆたかに立て 物掠あてむ 懐なつめおし 蛇崎へびさきと人は雖言いへごと
 崎みれバ 長閑のどかく出て 物ら吞くさるの口をし 雅士みやびの墨畫すみゑの
 島 嶋島じまの漕あこさび浦と 風雅かみに負る島の名 ふさはしく 負
 る浦の名 うべなうべな松島の浦は 眞ま細こさ島の眞ま秀は島 愛
 しき浦のし眞ま浦と 神代まほらより 今の現うつに 語繼 言繼ことつらけらし
 丸木船 榜はこもどほりて 萬段よろづ顧みみすれど 見る毎ごとに飽ぬ島
 かも あかぬ浦島

反歌

松島の八十島かけて漕行バ

浪の穂のへに黄金山の也

○佐久間象山の謫居の哥

佐久間象山

信濃路は ひなよはあれど うらくのしやまよものよも は
 るされハ かなささを、り 秋つけの紅葉あきばよやへり そをめ
 で、のゆき山ゆき あま乃日の くる、もしらま遊あそぶなる
 人もさはなり 志こころかれども さそら見るみは春の野の 花も
 かざさす 秋山の 紅葉あきばをも見ず たらちね乃 は、のかふ
 この まゆこもり こもりてながく 年としぞ經たにける

反歌

君がためたちは志りせむすべをなみ

あたらははひのおいらくをしむ

○西南の役より凱陣せし人を祝せるの歌

久方の 空も長閑のどかに あら玉の 春を迎へて 秋津鳥 風も
 静に 祝ひつる 程もあらせむ 武士もののふの 八十やそ氏川うぢがわに 立さ
 わぐ 波のよるひる いとまかく 君は臣らを引連れて 臣
 の君よも 従ひて 軍の庭よ 魁かけて 打つ討れつ そが
 なかに 實げにいやまゑさ 大丈夫まさらの わかさはらから 二人
 りづれ 向ふ矢庭に 飛くるの 雨か霞か 白瀧しろたきの岩をも碎
 く 黒鐵くろがねの 玉よ當りて はらからの 世よなき人も なり
 にさと 古郷ふるさと人の 傳へ聞きき皆打守りて 歎なげさるる 折しも
 事なく 歸り來てめぐり逢瀬あふせ のありけるは おすらたけを
 の 潔やまとこころぎよき倭心を しろしめす 弓矢の神は恵みにて い
 さを、世々に遺すなるらん

反歌

くろがねの玉もとほらす大丈夫が

君よつかふるやまと心の

○詠石菖歌

茲野貞融

おぼよそを乃御國ありながらこ、の名はなく漢籍に見え
 たるその名茂もちるたぐひかすすくなからををむある石
 菖はたいのひとつあるべまか、るたぐひは文詞にこそ石菖
 ちどかきもすれ歌詞よはよむべきならねばそのたぐひよ
 きてあやめ草といはむからにたれあらをとしむいひてらべ
 ないざらむしかをあれとなほまぎきぬべければりれいはほ
 におふるにつきて私に名つけて岩あやめといふそのうへか
 まかに縁劔真人また訓脊草などいへるもをかしければこ、
 にもまた乃名をつるぎ草とやいのまし山本晴香石菖をねく
 れり字を正宗といふときなむわが家の正宗なりけるかくい

ふは天保八年水無月

古の道踏學ぶかたはらになに手はなさむつるぎたちとればを
 ・まゝくそのにはひみればおかまゝく村肝の心のもきぬ神代より
 まのつるぎたちつくとふ人はおほけれ人の世乃よの末なか
 ら鎌倉の正宗こそこの此道乃聖なりけれそのをしへうけつかひ
 てま義弘のひたりにつひり亞聖則重はかまこかりけりわが家にもちつたへ
 よま義弘の作れる太刀はわか、りまほどのすさびにつくりつ
 るものにまあれは此道の物識人にまめすべきものならなくに
 われひとりめで、まらあき源のゐるか乃子とふみやびをがも
 ちつたへまし則重がつくれる太刀のむかまこの川中鳥まます
 らをま名をと、めたる山本の老翁をちかまのかも遠祖の名代とあ
 がめ今の世の人にまめせりわきさへのみればうるのしうるは
 しのわがはらからがつたへつるその則重とわがめたるその義

弘をはらからのつらにしあればまの子らが親としまゝ此道
 の聖ひじりといゆる正宗がつくれるこそゆめにだに見まくほりす
 れいかにして見るとを得むいかにして手にはふれむとつねに
 しもおもへるおの心をはる人ぞしる窓の内にそのひめも
 たる岩あやめ草のたほけれいほのよにいかなる人のすさびに
 か名を正宗とた、へけむつるぎなしたるつるぎ草われまねへ
 れりむなかたの縁すいしくはがたはもしろくにはへり朝まの
 眞清水た、へそのさまのまほふをぞ見る夕さればともしびか
 、げ其つゆ乃玉をこそ見れ正宗からはまらねども末の世のす
 がたまのあらまれを見る我こ、るまらみま人の得がてにそ
 とふ正宗を得して、ちすれ枕太刀たちにならべていましへの
 道ふみまなぶかたはらにこれをしおきてつねにかも見ん

新体詩歌第五集終

新體詩哥跋

登_レ高必從_レ低焉行_レ難必從_レ易焉故治_レ天下之事物_レ必有_二順序_一々々何耶曰當_下行_二事物_一之日_上不可_レ必欠_レ者恰如下_レ涉_二何海_一必用_二船舶_上也夫助_二國家開明_一進_二人智發達_一則在_レ于_レ學矣雖然學有_二難易_一故初學脩_レ之隨_二其順序_一從_レ易及_レ難而勉_レ之則易_レ覺而易_レ學也然余觀_二察當時人情_一百事唯期_二速成_一不_レ顧_二其順序等_一直學_レ難而置_レ易所以其困難不可_レ言於_レ是乎遂半途而挫_二折其志_一不_レ達_二目的_一者甚多矣譬若_レ登_レ梯子_レ追_レ序隨_レ段面不_レ踏_レ之直將_二飛越達_二其上_一則有_二陷墜之憂_一而無_二上達_一焉夫然然則豈焉得_レ為_二國家開明進步之裨益_一哉方今我國行_二民間_一彼俚歌俗謠是其最易々耳兒童謠_レ之走卒誦_レ之而猶感_二發人心_一不_二鮮少_一矣然未_レ有_下我國繼_二譯泰西之詩歌_一而公_二世焉_一是余害所_二常為_一遺憾_一也今也竹內君有志_レ于此蒐_下集係_二諸大家翻

譯_一之泰西詩歌與_中我本哥_上而名曰_二新體詩歌_一既有_二第四集_一之編_一焉今又第五集編成示_レ余且徵_レ跋余受而誦_レ之風調溫雅能得_二其體_一而語甚不_レ高一誦_レ之解_二其意_一也而熟讀玩味則覺_下字々有_二慷慨_一句々如_二金玉鏘戛_一餘音嫋々意味益深長_上然而一章快_二一章_一讀未_レ半不_レ覺拍_レ掌曰噫是真天下之快哥也余前所謂俚哥俗謠猶感_二起人心_一不_レ少然况於_二此集_一乎一流_二布民間_一則感_二動人心_一發_二舒其志氣_一而人々抱_二進取氣象_一至_下遂探_二學立_一之深奧_一以進_中我國文明之度_上昭々明_レ於_レ見_レ火矣然則此集益於世教_一果幾許哉感激之餘聊述_二鄙言_一以為_レ跋

于時明治癸未八月上浣辱交櫻陵居士

廣 瀨 要 人 識

明治十九年九月十二日 翻刻御届
同 年十月 出版

〔定價金二十五錢〕

編輯兼
原板人

竹 內 隆 信

翻刻人

大坂府平民

三 谷 平 助

東區安土町四丁目
三番地

發兌人

此 村 庄 助

南區順慶町四丁目
三番地

發兌人

岡 本 仙 助

東區唐物町四丁目
十番地